

アクセル・ワールド～  
加速探偵 E・G～

立花タケシ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バーストリンカーでにぎわう東京23区から外れた千葉県。その辺境に報酬さえ払えばどんな依頼も受ける探偵がいた。そこに一人の女性アバターが訪れる。「探してほしい人がいるんです」

※初投稿です。感想、アドバイス等々があると大変有難いです。

# 目次

加速世界の探偵	1
探偵の日常(?)	12
探偵 in 闘技場	24
忍者と奇術師	32
剛斧の担い手	39
邂逅と消滅	48
EGオペレーション	64
To the bar E&G	
或る日ノ店内	75
俺と彼女とアイツとダレカ	85

灰色の思い出	94
NEW Challenger	103
ウサギが仲間になりたそうな目で見て いる。	113



## Detective in the Bar

## 加速世界の探偵

夜の闇と街灯の明かりが摩天楼に立ち並ぶビル群を彩る。

しかし、街にあるはずの喧騒は無かった。

静寂であり、

閑散であり。

また人もいない。

なぜならば、ここが現実ではなく仮想世界——ブレイン・バーストと呼ばれるフルダイブ型ゲームのワールドだからだ。

ワールド属性《混沌》

その、静かに林立するビルとビルの間を息せき切った体に鞭を打ち、縫うように走る人影があった。

「はあっはあ……。どこまで追ってきやがるんだ！」

その黄土色をしたアバター、——ロエス・テンプルは、悪態をつきながらも足を

止めない。

「なんだよ！なんで追われるんだよ。……まさかアイツの事か？ アイツの代わりなのか……？ふざけるな！」

「はいはい。ストップ」

止まる予定のなかったはずの足は、突然目の前に現れたアバターに阻止された。

黄金色に輝くそのアバターは、ロエス・テンプルに比べるとシャープで、忍者のようなフォルムをしていた。

「お前だれだよ！いい加減にしてくれよ！」

逃げることをあきらめたのか、ロエス・テンプルは怒りにまかせて怒鳴り散らす。

「誰に頼まれた？ どうせアイツだろうがな！」

「依頼主に関する情報はNGなんでなんとも……。でも個人的な自己紹介をするとしたら——どうも探偵のゴールデン・ダークです」

「返り討ちにしてやる！」

同時刻

しかし異なる場所で、二つのアバターがシノギを削っていた。

一方は灰色をしたアバター。

ヒュンツ、ブウンツと手にした棒状の武器を振り回している。

もう一方は翠玉色をしたアバター。

「うおつと、危ねえな」

後ろに跳んで攻撃を避け続けるアバターは、装甲を身に着け頭と腰に生えた尻尾が爬虫類のようなフォルムをした、RPGにでてるリザードマンとよく似た風貌だった。

「おらおら！避けてばっかじゃつまらないぞ！」

「師匠が言った。相手を観察し、スキを見つけろ……そして」

翠玉色のアバターは避け続けていた体を停止させ、一気に踏み込み相手の懐へと間合いを詰めた。

「もしスキがないなら作り出せ」

常に相手を倒さんと回転していた棒の猛威が襲い掛かる瞬間、翠玉色のアバターは鉤爪状になった左腕を掲げ、それを弾いた。

「な——ッ、なに!？」

武器は弾かれ、がら空きとなってしまった灰色のアバターの腹部。

そこに狙ってましたとばかりに左方と同じく鉤爪となっている右腕を突き出す。

ブスリッ

と鈍い音と感触が、血飛沫を思わせる火花とともに伝わった。

「ガア——ッ。てめえ一体……?」

「探偵屋G・Eの片割れ、エメラルド・レックス。しばらく寝てな」

エメラルド・レックスと名乗った男のアバターの右腕が輝き、灰色のアバターの胴体を引き裂いた。

アバターで賑わう現実では東京と呼ばれる地域からはずれて数キロ。海沿いに一つ孤立した建物があった。

本来、ホームと呼ばれプライベートな事ではしか使われないはずのそれは、看板がつけられ、外装を変えられ、内装を改造し、最初の頃とは似ても似つかぬ建物と化していた。暗がりにも光る所々の電球が切れかけた看板。

それには「BAR G・E」と筆記体で書かれていた。

この世界の加速能力者達でいぎわうはずのない場所で営業するこの店には、主に二種類の客が入ってくる。

1つは単に酒を飲みながら愚痴を肴にする客

そして2つ目は2人しかいない店員にもう一つの仕事を依頼する客



もう一つの仕事——探偵として。

前者の仕事は立地条件もあり繁盛しているとは言いがたいが、常連客が数人いるくらいには働いている。

しかし後者の仕事は殆ど客はいない。困ったことがあつたといつても所詮は妄想の中の世界。それにこの店が探偵業をしている事を知っているのは表の仕事の常連客の中にも数えるくらいだ。

つまり、彼らに仕事を依頼するのはよつぽどの人しかいない。

それほど困難で、

それほど重要である。

今現在、店の扉には「CLOSE」の立札がかけられていた。

なぜなら先ほどまで店員総出で仕事をしていたからだ。

もちろん探偵の。

その閉じられた扉を力強く開け放つ者がいた。

「たっだいま。あく疲れた」

「そりゃ疲れるだろうな、あれほど暴れたら」

扉を開け、ズカズカと無遠慮に立ち入るアバターに声をかけたのは、先にこの店に

帰っていた店主だった。

エメラルド・レックス

この店の持ち主であり、探偵の一人である。

「いやさ、奴さんが予想以上に粘るもんだから熱くなっちゃったんだよね」

もう一人はゴールデン・ダーク

唯一の店員であり、探偵も兼ねている。

「だからってあそこまでやる必要はなかっただろ。今回の仕事はリアルを知られた相手をどんな手を使ってもいいから連れてきてくれ……だ。標的が全損しかけて、かつ怯えながら連れてこられたらそりゃ依頼主も驚くさ」

「依頼主も標的も探偵（おれたち）が気にすることじゃない。そうだろ？」

「師匠が言った。何事もスピードとスマートを大切に。お前はスマートさに欠けるんだよ」

「でも早いだろ？」

「……及第点だ」

たった二人の反省会。

ソファに深々と座りながら、半分愚痴のように言葉をこぼす。

流石は加速世界。

時間を気にすることなく、悠々と語らう事ができる。そんなこの世界がレックスは好

きだった。

時間を忘れることができる。

思春期の学生にはこれ以上の報酬はないかもしれない。

加速世界様々だ。

……と、途端に。

バタンツ

本当に突然に店の扉が開かれた。

二人はするはずのない音に驚き、体を強張らせる。

「あの……」

淡いピンク色。

流れ込むように侵入してきた夜明けのようなアバターは、開口一番言った。

「依頼しても良いですか?」

客用のイスに座らせた女性型アバターの名前はドーン・パンサー。

ドーンは夜明け、パンサーは豹からきているのだろうとレックスは考えていた。なにより頭に付いた猫耳でだいたいの予想はつく。

「あの……依頼を聞いていただけですか?」

客を観察していたレックスは組んでいた足をなおし、相手の話を聞く態勢になった。

「どうぞ。なにすればいいの？」

「お前はまた……。一応商売だからその態度を直せ」

「——いえいえ！おかまいなく」

両手をブンブンと振って申し訳なさそうにするパンサー。これではどちらが客かわからなくなってしまう。

「それで依頼とは？」

「はい。実は人を探して欲しくてですね」

「人探し？」

レックスは疑問に思った。

なぜなら彼ら探偵にとつてはあまりにも意外な内容だったからだ。

現実世界の探偵なら普通にあるような内容だろう。

しかしここは加速世界。現実とは常識が異なってくる。

時間は余りあまるほど存在し、人数を使いたいならそれこそレギオンに入ってしまった方がいい。

「あんたレギオンは？」

「入っていません」

「レギオンに入ったら即解決じゃないのか？人数だつて上だしなにより融通が利くだろう？」

「事情があります」

なるほどね。とレックスは思った。

これはただの人探しではなく、それなりの問題が関わってきそうだと  
となると

「報酬はどんなものを用意してあるんだ？」

「………これです」

「———はあ!?!人探しで激レアな強化外装もらえんの？まじで!?!」

ダークが驚くのも無理はないだろう。今回報酬として用意された強化外装は先ほどの仕事の報酬より価値としては高いものだった。

「理由をきいても?」

「すみません」

「………だろうな」

「え、どゆこと?」

一人話についてこれないダークを無視し、レックスは今一度話を慎重に聞く気になった。

「どんな奴をさがすんだ？」

「えっと、画像を送りますね」

送られてきた画像には粗いながらも大まかな特徴はわかるアバターが写っている。

少し茶色っぽい黄色をした牛のようなアバター。

「名前はウイート・ブル。この人を探して欲しいんです」

「こりゃ受けるしかないでしょ。だろ、レックス！」

「……………」

ドツカリとソファに深く座り、考え込むレックス。そして答えを出したのか立ち上がった。

「明日の同じ時間にまた来てくれ。その時に答えをだす」

その言葉に一番最初に驚いたのはパンサーではなくダークだった。

「お前ふざけてんのか？ こんないい仕事ないって」

「馬鹿は黙ってる。それで、待ってくれるか？」

「それでは先ほど渡した情報が——」

「ほとんどの事を話してもらえない状況に、高額報酬。何かあると思って当然だろう」

「……………わかりました」

泫々といった風にパンサーは了承する。

「明日また伺います」

そう言つてパンサーは立ち上がり、チリンチリンと店のドアを鐘を鳴らしながら開き帰っていく。

足音が遠ざかつていき、やがて完全に消え去つた後。ダークは待ち構えてたようにレックスに噛み付いた。

「なんで受けなかつたんだよ！ あんな好条件即決以外の選択肢なんてねえだろ！」

「さつきも言つたが事情もわからないしあんな高額な報酬。 なによりココにくる程の人探しがまともなわけがないだろ」

「それでも所詮は人探しだぞ？」

「あく今日はもういい！ 明日学校で話す」

そう言つたレックスは強引に立ち上がり足取り強く店をあとにする。

「…………え。 解散なの？」

一人取り残されたダークは寂しさとともに板張りの上に突つ立っていた。

## 探偵の日常 ( ? )

加速世界(あつち)にいと現実世界(こつち)のタイムロスはいかななものか、と。そう橘彰祐(タチバナシヨウスケ)は思った。

だが、この感慨も加速世界の住人だからこそ味わえるものだとおもうとまんざらでもなかった。

彰祐は一人、待ち人を弁当を食べながら待つ。

決して友人がいらないわけではない。

ただ会話を聞かれなくなかったからわざわざ人が来ない場所を選択し、陣取つたのだ。

「わりいわりい、待ったか？」

「待つてるから先に食べ始めてるんだ」

「うわっ、つれねえな。ちよつとくらい待てよ」

「師匠は言った。時間は有限だ、加速世界でも、現実でも」

「はいはい、ソーデスカ」



遅れてやってきた男、杉森勇魔は売店で購入したばかりのサンドイッチの封を切り、トマトとレタスとベーコンを挟んだいわゆるBLTサンドを頬張った。

「んで、ふおおふんだ（それで、どおすんだ）」

まだパンがのこった口でそういった。

どおするの4文字に含まれたのは、加速世界での昨日の依頼の話。

依然、ダークが心にしこりを残す、レックスが依頼を渋る理由だ。

「……飲み込んでから喋れよ。まあ、あんまり乗り気じゃないのは確かだ。もしだ、もしかしての話だがこれが6大レギオンとかに接触するようなモンだったらどうする。一瞬で潰されるぞ。いままで続けた物が一瞬でゼロ、最悪全損だな」

「……なんでそこまで考えるかな」

勇魔は嘆息しながらいった。

「だってあの報酬だぞ？そりゃ——」

「そうじゃねえ、そんなリスク計算ばつか考えてんじやねえつて話だ。お前は俺のことバカバカつていうけどお前も結構な馬鹿じゃねえか。昔はどうしようもなく困った人を助けるだけだったのにもう保身かよ。そうじゃねえだろ？」

飄々とした口調で心に刺さるような言葉を言われた。

しかし、それで彰祐は目が覚めた気分だった。

「……なったらなったらでやりやいいか」

「そうそう！」

コツンと二人は拳をぶつけた。

残った弁当を食べていると、彰祐が口を開いた。

「今の今で今更だがよ」

「……ん？」

「お前名前おかしくね？」

「——ぶふお……っ、ゲホゲホツ、どういうことだよ!？」

思わず咀嚼していたトマトとベーコンを吹き出してしまった勇魔。それを「きつたねえ」といいながらハンカチで拭う彰祐。

「だって勇と魔だぞ？勇者と魔王ってか、矛盾すぎるだろ。現実での矛盾存在（アノマリ）とはお前のことか！」

「あ、アノ?? そんなこと言うならお前だって中二病抜けてねえだろうが！」

「——なっ」

彰祐の顔が茹ったように朱色に染まった。

「どこがだよ！」

「雰囲気とか、たまにつぶやいてる言葉とかまんままるつきり中二じゃないか！」

その後もギャアギャアと敷地をにぎわす喧騒。

それが終わるのは予鈴のチャイムが鳴ってからだった。

「てなわけで、その仕事は受ける事にした」

「ありがとうございます」

二日続けてCLOSEと掲げられたバーの扉の内側から、そんな会話が響いてくる。

「さっそく始めちゃうけどいい〜？」

「あ、はい。……あの」

「ん、どうした」

パンサーがどこか申し訳なさそうに言葉を挙げた。

どこか吹っ切れたレックスは別にこれ以上の要求をされても構わないと思っていた。ただ、少しだけどんな事を追加されるか身構えてしまう。

「たいしたことじゃないんですが……」

「イーからイーから。言ってみ？」

「あの、依頼が終わるまでここで待っていていいですか？」

「あ、ああ」

変わった要求にお互い顔を見合わせてしまうレックスとダーク。

「……それだけ？」

「え、はい。それだけです」

少女はさも当然のように答えた。

「別にそれぐらい許可がいるようなことでもないんだが、時間がかかるかもしれないが、いいの？」

「大丈夫です」

「それならいくらでも居てくれてかまわない」

パンサーはただ頭をさげるだけだった。

「さて、それじゃ行くか」

「そうだね、いこっか」

わざわざ何処にと言わずとも通じる仲である。二人はゆっくりとソファから立ち上がり、迷いなく扉へと向かう。

「ま、店番頼むよ」

「は、はい！」

ギイ、と年季の入った扉を軋ませ、金色と翠玉の背中は遠くなっていく。

「お前帰ってくるのはやくね？」

「いやいや、レックスも十分早いよ。随分と身軽そうだね」

「あの、お二人とも」

「ダークの野郎がやんのかこらあ！」

「だまれトカゲ！」

「ここはどこかのフィールド——、ではなくG・Eの店内。

颯爽と駆けだしたダークとレックスはなにやら足取り重くこの店に逆戻りしてきた。

これがついさつきまでのお話。

いまでは仲良くどつきあい、火花を散らしあっている。

「てめ、また成果なく帰ってきやがって……」

「そっちだってあんな恰好つけて手ぶらとか」

「いや、あの……そろそろ」

まさに五十歩百歩

目くそ鼻くそ戦争

同じ穴のムジナである。

「落ち着いてください！」

突然の近くからの怒号に、今まで取っ組み合いをしていた二人はビクツと体を震わせ  
静止する。

「何やってるんですか！ こっちは仕事を待っているのに喧嘩しだすなんて探偵とは到底  
底思えませんよ！」

その言葉に二人ともが「あ……いや」「そのだな……」と目を泳がせつつしどろもどろ  
うろたえだす。

「わかった、怒るなって、それじゃあ一応経過報告するから。 なっレックス」

「ああそうだな。それじゃお前から言え」

「おっしや！ 俺はだな……」

○ ○ ○

S I D E ゴールデン・ダーク

BAR G・Eの建っているような辺境とは別の趣がある、つまりはバーストリン  
カーと呼ばれる異形の者たちで賑わう場所にダークは来ていた。

「人、人、人つと。視界に必ずアバターがいるつても久々の感覚だなあ。さてと、  
だ・れ・に・し・よ・う・か・な〜つと」

ダークは街の中心に立ち、品定めするように色とりどりのアバターを指を次々に指していく。その品定めは終了し、指先の指す方向にはピツタリと薄茶色のアバターが存在し隣にいる水色のアバターと談笑している。

「ひたひたとダークは極限まで足音を薄めそのアバターに背後から近づいた。

「ちよつとすいません。少しイイですか？」

「俺？ はいはい何かな？」

友達と思われる人との会話を中断し、こちらに振り向いた薄茶色のアバターに先ほどもらったばかりの画像を見せる。

「この画像に載ってるアバター知らない？ ウィート・ブルっていう名前んだけどさ」

「いや知らないな。お前は何か知ってるか？」

「しらねえな」

薄茶色のアバターは隣のアバターにも聞いたがどちらも首を横に振るばかりだった。

「ふくん、それじゃあさ……」

ダークの声のトーンが少し冷たくなったような気がした。まるで獲物をねらう獣のような鋭さをもった冷たさだ。

気づけばダークの右手には黒く鈍い光を発するクナイが握られていた。このことに誰が反応できただろうか。

その右手は目の前に突き出され、鉄の切っ先は薄茶色のアバターの腹部に埋もれていた。

「本当に知らない？」

「——っ!? が…あ、なん、でだよ。」

「お前なにしてるんだ！」

「あ、ホントにしらないのね。ゴメンゴメン」

ダークは軽い調子で謝るとクナイを引き抜いた。

「……てめえ、ただじゃおかねえぞ」

「どこのどいつかわからねえが突然コイツの脇腹ぶっ刺した落とし前キツチリつけてやる」

「これはバトルしろってこと？ そうなのかな？」

「うっせえぞ！ 叩き潰す!!」

薄茶色のアバターのハンマーの形をした右腕が風を切りながらダークの頭上へと振り下ろされる。

しかし、地を響かせるほどの威力を纏ったそれは、結局はダークの頭部を叩き割るところはなかった。

ダークは咄嗟に二人と距離を取っていた。



「これは……2対1のバトルって解釈しちゃってもいいのかな？」

「この野郎！　すぐにその余裕なくしてやる！」

この騒動に徐々に周りにいたアバターが集い、野次馬と化しグルツと円を描き即席のリングを作り出す。

「観客もいることだし、ちやつちやつちやつちやいますか！」

こうしてダークは目の前の相手を刀を交えた。

○ ○ ○

「え、終わり？」

店内にレックスの呆気にとられた声が出された。

「いやいやこれは一部だからね！　あと4人に声はかけた」

「4人でも少ないですよね……」

パンサー本人はただの眩きだったのだろう。しかしそれはダークの耳にしっかりと届き彼の心に多大なダメージを与えるのに凶らずも成功していた。

「てかさ、お前今日何回バトルした？」

「4回…… فقط」

「全部だろーがこの野郎！」

レックスは机をドンツと叩き怒った。

「なんでお前はいちいちバトルするんだよ！ 大体さっきのだってなんで刃物で刺したの？ なんでもう一度聞いたの？ 意味わかんないんだけど！」

「人は痛みの前には正直なのさ……」

「ドヤ顔しない！ お前そんなサイコなキャラだっけ？ 怖いよもう！」

「レックスさん落ち着いて」

「落ち着いてられるか！」

レックスは言うだけ言うと言で息を吸うほど疲れ果てた。

「はあ……つはあ。それで成果ゼロと……」

「ポイントは稼いだけどね」

とうとうレックスはうなだれることしかできなかつた。コイツはただ自分のためにバトルをしに行っただけじゃないだろうか、そういわずにいらなかったがそんな体力は残っていない。

その様子を見て、パンサーは慌てて話題を変える。

「れ、レックスさんはどうだったんですか？」

「俺？ そうだね、——ん？」

何かを言おうとしたレックスの視線が少しズレた。

まるでメッセージか何かを見てるように。

「なら聞かせてやろう、俺の成果を」

途端、レックスの口は饒舌に滑り出す。

「ダーク、いまからアキハバラBGに行くぞ」

## 探偵 i n 闘技場

アキハバラBG

正式名称「アキハバラバトルグラウンド」

東京台東区は秋葉原、アミューズメントビル・カドタワーのローカルネットから入場できるかけ闘技場。

絶対中立域にてバーストリンカーの聖地。

天井から吊り下げられた大型モニターには何かの文字と数字が常に動いており、その画面を食い入るように数々のアバターが双眸で眺める。

そこに二人のアバターが来ていた。

「なんでわざわざこんなところに？ その情報提供者の趣味が疑われるね」

「お前に疑われるような趣味を一般人は普通と言う。まあ黙ってついてこい」

小型の恐竜型アバターと忍者型アバターは自分たちの店とはどこか似た雰囲気を持ちつつもまた別の個性をもった赤く錆びたスチームパンクな内装の酒場を闊歩する。

「景気はどうだい？」

レックスはカウンターの前に来ると、両腕をのせ体を預けながら目の前のアバターに悠長に話しかける。

「見ての通りじゃよ、探偵屋」

「……え？」

ダークは驚いていた。たとえ目の前のアバターがレックスの知人だとしても、決してレックスは簡単にその仕事を話さない。

なのに知っていた。

「おい、何を呆けているんだ。この人が情報提供者の「マッチメイカー」だ」

「お前らの噂はきいとるよ。今回だつてそう。おぬしらが人をさがしとると小耳

にはさんでの。だから協力してやろうとな」

マッチメイカーと呼ばれたドワーフ型のアバターは自慢げにその立派なヒゲをピンと立てた。

そのヒゲの奥に除く口の端は吊り上っている。

「で、その情報とやらは？ 情報料も言い値で払おう」

「いやいや、そこまで高い情報ではないんじやよ。わしが教えるのはその人物を知っているであろう人物じゃからな」

「へえ、なるほど」

レックスはうなずき、ダークはいまだに状況が呑み込めていない。

「その人物とは、どこにいる?」

「そやつの名はホライズン・アックス。居場所はホレ、あれをみるんじや」

察しのいいレックスは頭だけで振り向き、大型モニタの文字列に目をやった。

【「ホライズン・アックス Lv6」 & 「キャナリー・マジック Lv5」

1・24 VS 「ペル・ティンク Lv5」 & 「インディゴ・フロウLv5」 5・

16

「高ウツズの選手（ファイター）ってワケか」

「え、ここって闘技場なの?」

2〜3週の周回遅れな言葉をもらすダークに嘆息しかでないレックス。

「そうだ。ちなみにここの存在を教えなかったのはお前が入り浸るからだ」

「うん、確実に入り浸るね!」

「マツチメイカー、出禁を一名追加だ」

「うむ、了解」

「いやいや! ちょっとまってよ!」

二人のやり取りに慌てふためくダーク。

二人が「ははは!」「ぶわあっはっは」と大笑いされるまで自分がからかわれているこ

とに気付かなかった。

「ところで、選手が情報を持っているとしてどうやって会えばいいんだ？」

「そんなの簡単じゃよ。いや、難しいかもしれないがそこは探偵屋、我慢強いじゃろ？  
ホレ、まずはタッグを組め」

「……？ おいダーク」

「はいよ」

二人とも慣れた手つきでオプシヨンをひらきタッグを組む。

「それじゃこのボタンを押すんじゃ」

「はいはいっと」

「——ん？ あ、おいちよつ、待て！」

レックスの制止もむなしく、時すでに遅し。

ダークの指先はポチリとソレを押ししていた。

少し横を見てみれば、ヒゲをたくわえた年季の入った顔が意地の悪い笑みを浮かべている。

「どうしたんだ？」

「お前……アレ見ろよ」

レックスが指をさし、その方向につられてダークは首を動かす。

その方向にあるのは例の画面。

そして見覚えのある名前が二つ

【「エメラルド・レックス Lv6」 & 「ゴールドデン・ダーク Lv6」】

「さて、「T・レックス」と「金色のシノビ」の実力をみせてもらおうか」

「運が良いのやら悪いのやら……、結局2回余分に戦うハメになっちまった」

「まあいいじゃん。1000円儲かったし」

二人は現在《原始林》ステージで来るべき相手を探し歩いている。

相手はお目当てのホライズン・アックスとキャナリー・マジックだ。

この二人にたどり着くまでに2回の対戦を経て、少々疲労気味での3回戦目。しか

し本命のご登場にやや高揚している。

この試合のウツズは

【「ホライズン・アックス Lv6」 & 「キャナリー・マジック Lv5」 1・5 1

V S 【「エメラルド・レックス Lv6」 & 「ゴールドデン・ダーク Lv6」 2・3

9

と、あちらに傾いている。



流石は人気ファイターなだけはある。そうレックスは思った。

「レックス、やつこさんのご登場だぜ」

「お前らが今回の相手か。いいねえ、特に緑の！ なかなか堅そうじゃねえか」

白みがかった青色をした甲冑を着込んだ騎士型アバターが、自身の身の丈ほどありそうな大斧を片手で振り回す。

「お前がホライゾン・アックスか、強いらしいな」

「らしいじゃねえ、強ええぞ」

「対戦前に一つ聞きたいことがある。いいかな？」

「いいだろう、なんだ？」

アックスは鼻歌を歌いながら、大斧を肩で担ぐ。

「ウイート・ブル。知ってるな？ コイツについて教えてほしい」

その名前を出した瞬間、アックスの動きが止まった。

鼻歌をやめ、陽気に動き回っていたのが嘘のように殺気立つ。

「何故……と聞こうか」

「会いたいからだ。ダメか？」

「なるほど、良いだろう。ただ——、」

「な——っ、！」

アックスは言い切る前に踏み込み、一気にレックスと彼我の距離を詰める。その勢いにのって大斧を振り上げ――。

「俺を倒したらな」

ズドオオオオン！

と、重力と質量に任せた剛斧が大地を割り、土埃が舞う。

「レックス!？」

「チツ！ 手ごたえなしか」

風が土埃をさららい、視界がクリアになる。

そこには地面に深く突き刺さった大斧と、紙一重で避けたレックスが佇んでいた。

「まさに間一髪ってな。これが開戦の狼煙か？」

「それじゃ、俺が先に頂いちやうよ」

いつのまにかダークはアックスの背後に立ち、手にはクナイが握られていた。

「まずは一撃くら――、ツガア！」

アックスの脇腹にクナイを突き刺そうとした瞬間、ダークは不意の横からの衝撃に耐えきれず吹き飛び地面を転がる。

「僕を忘れちゃ困るよ、金ピカお兄さん。お兄さんの相手は僕がするよ」

ダークに蹴りを入れたのはアックスの相棒、キャナリー・マジック

マジックはダークが転がった方向へ歩を進める。

「さあ、始めようかいね」

低く唸る声の持ち主がレックスの前に立ちはだかる。

## 忍者と奇術師

「お兄さんこつちよろでつておいでよ♪ なんてね」

木々が鬱蒼と林立し生い茂る中をマジックは少しスキップ気味に歩き回る。

いや、正確に言えば探し回っていた。

「こつちかな〜？ いやこつちだ——ツと、危ない危ない」

木々の間を覗いているとマジックめがけクナイが襲い掛かる。マジックは軽く後ろに跳び、先ほどまでマジックがいた位置にクナイが突き刺さる。

「結構良い反応するじゃないか」

その声はマジックの真上——正確には大木の枝の上にいるダークから発せられた。

「いえいえ、お兄さんだつて心配がまったくないじゃないですか。さすが「金色のシノビ」ですね」

「懐かしいものを知ってるね〜。うれしいよ」

ダークは乾いた微笑みを作りながらマジックを鋭い双眸でとらえる。

「金色のシノビ」

いわずもがなゴールデン・ダークのいわゆる二つ名、通称である。

このブレインバーストのバーストリンカーの中でも少しは名の知れたリンカーになると異名がつけられる事が多々ある。

6大レギオンの長、純色の王たちを筆頭に様々な名リンカーに付けられてきた。

「不動要塞（イモータル・フォートレス） スカーレット・レイン」 「絶対防御（インバルナラブル） グリーン・グランデ」などがいい例だ。

「千の手段で音もなく相手を仕留める加速世界一派手な忍者……僕は派手な時点で忍者失格だとおもってただけど、なかなかどうして」

「そこまで知ってるならフルコースをご馳走しないとね、——ホラよっ！」

ダークは木の枝から静かに落ちる。それと共に幾つものクナイが弾けるようにダークから撃たれ、マジックを穿たんと突き進む。

マジックは今にも射殺さんとするクナイ群を手に持ったステッキで弾き、全てを捌く。

「でもこの程度じゃ！——いない!？」

「蹴りのお返しだ」

「しま——っ!」

背後からの奇襲に対応できるわけもなく、マジックはダークが振り下ろすクナイに背中を裂かれた。

「痛——ッ！ 全くもって面倒なお兄さんだね」

「甘いが面倒どころじゃすまないぞっと！」

一体どこから出てくるのか、尚も無数のクナイがマジックに飛来する。

「甘いのはお兄さんだよ、《マジック・ミラーワールド》！」

クナイがマジックの肢体に突き刺さる瞬間、マジックはそう叫んだ。

そして——、砕けた。

マジックはクナイが触れた途端にバラバラに砕け散り、粉碎された。

「うん——？ どういうことだ？」

その目にあわせたダーク本人が訝しげな表情を見せる。これは明らかにおかしいと。

「やった……のか？ とりあえずレックスの元に向かうか」

ダークは踵を返し遠くで聞こえる破壊音の方へ向かおうとすると——

「——のあ!? って、て俺がいる!？」

歩き出して数歩、いきなり何かに衝突したかと思うと目の前には自分だった。

「意味ワカンネー……っって鏡!？」

目の前自分がパントマイムのように同じ動きをするので、それは虚像の分身と気づく

ことができた。

「……原始林だよな？ なんで鏡なんかが……」

まじまじと鏡を覗きこみ、似非ものの自身とにらめっこをしている。

すると、あるはずもないが鏡が波打ったように見え、ダークは「んん？」と目をこする。

もう一度よく見た鏡には、体はそのまま顔だけ先ほど倒したハズのマジックとなつたアンバランスな虚像が写っている。

マジックが口角をつりあげた瞬間、ゾクリと背筋が凍ったようにつめたいなにかを感じ、ダークは反射的に体をそらす。

半瞬遅れ、一帯に破砕音が響き、鏡が粉々になつた。その中からマジックのステッキが突き出されていた。

「まさか避けちゃうなんてね、お兄さんはスゴイスゴイ」

手に持ったステッキを腕にかけ、空いた両手で拍手をしながら心のこもっていない賛辞を贈るマジック。

「でも、次はそうはいかないよ」

返礼とばかりにその言葉に返されたのは一本のクナイ。そのクナイを中心に世界にヒビが入り、空間が砕けたように見えた。

「さあ、かくれんぼの続きだね」

「厄介だな」

ダークは即座に逃げる——ことが出来なかった。

いつの間にか張り巡らされた鏡の迷路。

走るたびに鏡にぶつかり、忍者と擲揄されたバーストリンカーは方向感覚さえも朦朧としかだしていた。

「どつちかな？ どつちだろうね？」

マジックの声は四方八方から響き、場所の特定ができない。

それも相まってダークのストレスゲージを否応なく満タンにさせる。

「あああああああああ！ もうまどろっこしい！」

足を止め、咆哮するダークは鉄製の紐のような長細いものを手にしていた。両端には円柱の重りと三日月のように鋭く尖った刃。

——鎖鎌。

「しやらくせええええ！」

ダークは鎖鎌を遠心力にものを言わせ、円を描きながら薙いだ。

辺りで鏡が割れ、その破片が飛び散り木漏れ日に輝く。

「まったく強引な手にでたね。でも隙だらけだよ！」

その破片の中からマジックが現れ、がら空きとなったダークの体にステッキを突き立てる。



「舐めるなよ、《技泥棒》【トリックスティール】!」

スティックは金色に輝きだしたダークの右胸に突き刺さる。それに対してダークの反撃は左の拳がマジックの体をかすめるだけだった。

マジックは短く息を吐き出しステッキを抜く。そしてまたもや鏡の森の中へと霞のように消えていった。

「危ない危ない。今のは技ですよね？ 当たっていたらどうなっていたやら」

その挑発めいた言葉にダークはただ右胸を抑えているだけだった。

「流石は金と言ったところかな、柔らかい。もう残り5割ですね」

ダークのHPはたったの2撃で半分しか残っておらず、対するマジックは9割も残している。

「さて、これがトドメだよ!」

マジックは木と木の間から姿を現し一瞬でダークとの距離を詰めた。そしてダークの眉間にステッキを突き立てる。

しかし、それでもダークの残りのHP5割を削ることはできなかつた。

——否、そもそも1割1分とて奪うことができていなかった。

変わりにダークとその周りがバラバラに砕け、そのあとからダークだけが消えた景色が見えるだけだった。

「——ッ!? 鏡……だつて!」

本来自分の手札であるはずの鏡。その鏡が自分に仇をなしたなど考えられる訳がなく、数秒の間放心状態となつてしまった。

そのたつた数秒。

それがこの勝負の分かれ目となつてしまった。

喉元に冷たく鬼気迫るような感触。

変化に気付いたマジック、その口角は吊り上り冷や汗がながれる。

「ははっ……。完全に一本取られたよ。一つ良いかな、あの鏡はどこから?」

「死ぬ者には語るのが忍者つてね。あれが俺の技、一度見た相手の必殺技をコピーするのさ」

「なるほど……。合点がいったよ」

「《一閃・頸狩り》」

ダークの体がまたも輝きを放ち、マジックの体力は一瞬で消えた。

## 剛斧の担い手

時は戻りダークとマジックがともに消えた場所、そこに二人のバーストリンカーがシノギを削りあっていた。

「いいねいいねえ、なかなか骨のある野郎だ！」

「クソツ、ゴツイもん振り回しすぎなんだよ！」

アックスとレックス。二人の周囲はまさに惨状と呼べるもので、幾つもあった大木がその周りだけなくなっている。

全てはアックスの剛斧が起こした結果だ

身の丈ほどもある大斧の一振りをレックスが防ぎ、その矛先がズレる度に木々が一本一本なくなってしまう。

いや、今の説明では誤解を招いてしまうだろう。まるでアックスとレックスがまとも打ち合えているかのように。

それは違う。

正確には、レックスは己の武器である両腕のクロウで攻撃を受け流している。

もし、真正面から攻撃を防ごうものなら押しつぶされ、圧力でもって無造作に叩き割られるだろう。

それほどまでにホライゾン・アックスの斧は強力で圧倒的だった。

「おいおい、俺のどこが骨のあるやつなんだ？ 受け流してばっかだろ」

「ははっ！ それでいい。今までの奴は遠距離で豆鉄砲をパンパン撃つか、はたまた影からこそこそする不届き者ばかりだったからな！ 正面から受ける奴に出会えてうれしいんだよ！」

「全くもってそいつらの気持ちがわかるよ。それで、その不届き者はどうなったんだ？」

「俺のウツズを見てわからないか？」

きっと真つ二つになったのだろう。そうレックスは悟った。

流石は猛者の集うアキハバラBGの高ウツズリンカー。今までの対戦者よりも一味もふた味も違う。その威圧感に、レックスは押しつぶされそうになる。

横薙ぎの攻撃は上方へと。

縦に叩き割るようになるのは少し体をずらし真横へ。

最低限の動きで最大限の効果を出す。それがレックスのスタイルだ。

「なんだかんだ言ってお前も相当やる口だな」

「ありがとうさんよつ、と！」

剛斧をいなし続け、ようやくできた少しの隙。

それをレックスは見逃しはしなかった。

「グッ——、やるねえ」

レックスの鉤爪はアックスの脇腹を数センチ切り裂き、アックスの体力を削った。

「完全なパワータイプってのは攻撃のスピードが遅いって相場が決まってるんだ

よ」

レックスは両腕の鉤爪を勢いよくこすり合わせ、火花を散らす。

これはレックスが調子を上げてきたときにする癖だ。

「さて、こつからもいくぜ！」

「——ハッ……ハハハハハハハアアア！」

突然、まさに唐突にアックスは狂ったように笑い出す。

それは歓喜の笑いにも聞こえ、またはレックスをあざ笑っているかのようにも聞こえてくる。

てくる。

「なあ、「グラフィイト・エッジ」ってリンカーを知っているか？」

その急な問いに、少し、ほんの少しだがレックスの顔がゆがんだように思えた。

「知っているが……、それがどうした」

「俺はな、その話を聞いたとき衝撃を受けたのさ。強化外装にポイントを極フリして、その剣技は王をしのぐときえ言われたその戦闘スタイルに……」

「その大きすぎる斧が憧れの結果ってか？」

「違う違う。第一グラフィイト・エツジは双剣を使うリンカーだ。大斧使いがどうして双剣使いに憧れるんだよ」

「……？ ——っ！ まさか……」

レックスは嫌な予感がした。背筋には冷たいものが走り、もしそれが本当だったとしたらと焦る。

グラフィイト・エツジは双剣使いのリンカーで、現在は失踪している黒の王の剣の師とうたわれるほどの実力者だ。

その剣は全てを切り裂き、また全ての攻撃を弾いた。

ついた異名が「矛盾存在（アノマリー）」

もし、アックスがそのアノマリーに類似したリンカーだとしたら。

「さあ、俺の本気を見せてやろう」

アックスの手にしていた両刃の斧が半分に分れた。いや、正確にはもとに戻ったのだろう。もともと片手斧だった武器が二つ合わさり大斧となっていたのだ。

「これが俺の本当の武器、双斧（そうふ）だ」  
地平線色のアバターに握られた一対の斧。

「第二ラウンドだ」

その2本の白銀に鈍く光る対照的な斧が、レックスに猛撃の牙をむく。

荒々しく、かつ精密に。

攻撃は最大の防御とはよく言ったものだ。レックスは左上から振り下ろされたら右腕を振り上げ弾き、下から怒涛のように突き上げられると体を捻り避ける。

その一つ一つの攻撃に隙がまるでない。

反撃する余地が一部もなくなっている。

それでも、アックスが猛追し、レックスが全てを防ぐという形で拮抗は保たれていた。

「しゅといねえ。ま、そうじゃないとなー！」

「クソツッ！ 余裕だなこの野郎！」

たとえ半分に鳴ったとしても、元が地面を揺らすほどの威力を秘めていたのだ。半身の片手斧でも、その威力は並大抵ではなかった。

現に、アックスの攻撃を受け続けているレックスの腕は痺れ、もはや感覚が無くなっているほどだ。

ただ無意識的に、

上から来た攻撃は右手の鉤爪の甲で迎え打ち。

横なぎの斧は左手の側面向きをそらす。

たとえ感覚がなくとも、意地と気合で動かし慣れている両腕を操作し、命を削り取るうとする攻撃から身を守る。

これで模倣なのだ、さぞかしオリジナルのアノマリーは強かったのだろうとレックスは気の抜けない戦闘中にもかかわらず思っていた。

グラフアイト・エッジはレックスも一度は憧れたリンカーだった。

ただ、レックスの師匠から「あいつは剣がないと何にもできない。剣があつたなら、なんてタラレバ根性なんか持つなよ」と釘を刺されていたので、その憧れも数秒で潰えてしまっていた。

「まったく、強いな。でも——っ」

「でも……弱点はあるってか?」

「——ッ!？」

レックスは動揺した。自分の言わんとしていたことをアックスに先にいいあてられたからだ。

そして、その動揺からくる半瞬の硬直が、レックスにとっては致命的な——それこそ絶体絶命と呼べる隙を作ってしまった。



アックスがその隙を見逃すはずがなく、まず、双斧はレックスの鉤爪を弾き、レックスは大の字のような態勢になった。

全身ががら空きとなった今、レックスは為す術なく双斧の刃がその軀に牙を突き立てられる。

脇腹、胸、肩、アバラ。

見えるところの次々と深いキズが出来上がっていく。

しかし、それでも緑色タイプのアバターだった。レックスの体力の減少は少なく、なかなか減らない。

「硬いねえ。これなどうか？」

連撃を繰り返していた腕を止め、アックスは右側に両腕を下げ溜めのような態勢をとった。

「《ジャック・ザ・サーキュレイト》」

アックスの体がブレたように思えた。そして気づいた時にはアックスは目の前に迫り、今にも両手に握られた斧がレックスの体を切り裂き、真つ二つにしてしまおうと振り下ろさせる。

レックスは野生の感ともいえる速度で、反射的に体を捻る。

そのおかげでシンメトリーに斬られ、命を奪われることは回避できた。

代償は腕一本。

焼けるような鋭い痛みがレックスの全身を駆け巡り、体の一部を失ったことからバランスを崩し地べたに這ってしまおう。

「あれを避ける……か。お前は強い。俺の次にな」

勝者の余裕か、アックスはレックスの前に屈みこみ、トドメを刺さず話かけた。

「まあ、最初に言ってた事を覆すことになるが教えてやるよ、ウィート・ブルの事を」  
アックスはレックスの返事を待たずに続ける。

「あいつは俺のダチなんだよ。だが最近様子がおかしくてな、ここ最近めつきり話してねえ。もし会いたいんだったら霞ヶ浦にある湖畔に行けば会えるかもしれないな」

「そうか……ありがとよ」

「いいんだよ、久々に楽しませてくれたしな。それじゃ、オサラバ——」

「——師匠が言った。最後まで油断するな、瀕死の敵ほど恐ろしいものはない」  
レックスはアックスの言葉を遮り、ポツリと言った。

「さつさとトドメを刺せば良かったのに、情報までくれてありがとさん。だけど俺は、勝利だつてもらっていくぜ」

最初、こいつは何を言っているんだとアックスは思った。この圧倒的有利な状態から

挽回されることなどあるはずがないと、必ず勝てると、あるいは固定観念のような確信を持つていたからだ。

だが、それは慢心へとつながった。

「俺は昔「T・レックス」って呼ばれてたんだよ」

レックスは地面に這いつくばりながらもしつかりとアックスの双眸を見据えながら言った。

「見せてやるよ、俺のアビリティ。《エボリユーシヨナル》！」

這いつくばっていたアバターの形が変形——否、膨張しだしていた。

両足は大木のごとく太くたくましく、頭は顎が特に成長し、全てを飲み込んでしまいうようなほどの大きさになってしまった。

その姿はまるで恐竜。

アックスはその変貌に戦慄した。

「おいおい、反則じゃねえか……」

恐竜と化したレックスが横なぎに首を振り、顎を開きアックスの捕える。

アックスは暴れていたものの、数秒で力が抜け、ダラリと足が垂れ下がった。

数秒ののちにアックスの体は破片となり爆散した。

## 邂逅と消滅

「ウイート・ブルは霞ヶ浦にいくと会えるかもしれない。千葉県と茨城県の境目にあ  
る湖だろう。俺とダークは一度ログアウトしてから向かうつもりなんだがどうする？

お前はソツチから直接向かうか？」

レックスはアキハバラB・Gのロビーでそうメッセージを書き、パンサーに送った。  
するとすぐに返事は帰ってきた。

「私はここで待たせていただきます。ありがとうございます」

簡素に書かれた文に、レックスは「お礼は仕事が成功してからでいい」と送り返すと、  
今度は返信は来なかった。

「それじゃダーク、一度出るぞ。集合場所は戻ってからメールする」

「はいよ」

短く返事をしたダークは、そう言ったとほぼ同時にアバターは光の粒子とたり加速世  
界からログアウトした。

「さてと、ようやくこの仕事も終わりか……」

なぜかどこか感慨深くなってしまい、少し錆びれた鋼鉄の壁に背中を預けながら黄昏るレックス。

「探偵屋、いかにいいのかね？」

ヒゲの蓄えられた厳つい顔のアバターに声を掛けられ、レックスはゆつくりと壁から背中を離した。

「それじゃ、邪魔したな」

「かまわん、ここはバーストリンカーの聖地、絶対中立領域。またいつでも遊びに来

るといい」

背中にかけられた言葉にレックスは右手を軽く上げて答えた。

そしてレックスの体も光となって消える。

「なあ、霞ヶ浦ってこつからどのくらいあるの？」

「聞かない方がいいと思うぞ」

ここはカドタワーの駐車場。二人の少年がバイクにまたがりヘルメットを装着しながらそんな会話を繰り返していた。

「ギョつと10キロ？」

「それでぎりぎり東京からできたかな？」

「ざっと20?」

「おく近くなつたな!」

「30だな!」

「おめでとう。中間地点の俺たちの故郷だ」

「……」

勇魔の顔からは生氣とやる気が圧倒的に消え失せてしまい、半ば白目をむきかけたようなひどい有様となっている。

「戻ってこい、実際には家に戻るだけだ」

「……、——つえ? なんで?」

彰祐の一言に息を吹き返した勇魔。その声はヘルメットのシールドを下したおかげで籠って聞こえにくい。

「わざわざ霞ヶ浦まで行ってみろ、居る可能性が高いだけで居ない時もあるんだ。金と労力の無駄だよ。それよりも自宅から入って向かう方が結果的に楽だ」

「な、なるほど?」

いまひとつ頭の処理がおいついていない勇魔は首をかしげながら返事を返し、バイクのハンドルを握った。

「あつちに入る時間はあとでメールを送る。とりあえず自宅に戻ってベットに寝そ

べつてりやいいんだよ」

「あいよー」

勇魔が力強く答えた。

——同時、両者のバイクにエンジンの駆動音がコンクリートの檻の中を轟かせた。

地下を抜け、一気に外界へ解放された二つの無骨な機械の塊は、颯爽と立ち並ぶビル群を流していく。

全身に感じる疾走感に、彰祐は心なしか高揚していた。

『彰祐、ちよつと飛ばしすぎじゃね?』

風で服をなびかせ心地良い気分浸っていると、ニューロリンクを通して無線が勇魔の声を再生する。

「大丈夫、どうせリミッターが掛ってるんだから」

『そうだけだよ……』

そこで勇魔の声は途切れた。

自分達の住む街——千葉県印西市は秋葉原から約30キロ離れた街で、開発が進み交通量が多く住みやすい街だ。

目指すは駅のホームの近くに建てられた高層マンション。

長い道のりだがバイクに乗ることが好きな彰祐にはなんら苦にならず、むしろ道が長  
いだけ得した気分になっている。

その上勇魔という気の知れた話相手とともに走っているのだ、気付けば県を越え、目  
的地がまじかに迫っている。

「それじゃ、ちゃんと起きてろよ」

「大丈夫だって、じゃあな！」

先に到着したのは彰祐。

ビルの前で片手を挙げ勇魔と別れを告げた後、ビルの駐車場にバイクを止め、マン  
ションへと入る。

良く声の反響するガラス張りのエントランスを通り、上向きの矢印を押して数十秒。  
ベルの弾けるような音とともに鉄の扉が開き、エレベーターに入る。

少しの浮遊感と目的地に着いた瞬間の重力。

開いた扉を抜け少し歩き、扉の前に立つ。

ドアノブを持つとニューロリンカで住居者と判断され、自動的にロックは解除され  
る。

手を回し扉を開くと「おかえり」と聞きなれた母親の声が聞こえた。



「ただいま」

と、適当に挨拶を返しつつ歩は突き当りの自室へと真っ直ぐ向かう。

質素なドアを開き、カバンを床に放り投げる。

勢いのままベッドにダイブし、また起き上がって腰かける。

「疲れた……。でもこれからが本番なんだよなあ」

誰に聞かせるでもなく、そんな独り言が自室に漏れる。

彰祐は無言のまま虚空に指を突出し、這わせる。視界には便箋が出現し、その下に表

示されたキーパッドで文章を作成した。

「18:00ピツタリに入れ、集合場所は学校の前で良いだろう」

簡潔に書いたそのメッセージを指でピンツ！と弾き、勇魔の元へと送信した。

少々の間返信を待つ。

それでも来ない応答に「まああいつだから……」と自分に言い聞かせるように小さくつぶやく。

10分くらい経つただろうか、18時まであと8分。

彰祐の額には冷や汗と脂汗が浮き、少し目が血走っていた。

「あいつはあいつはあいつはあいつはあいつはあいつは……」

脳はゲシユタルト崩壊し、足は震源地にでもなろうかというほどに貧乏ゆすりが激し

く行われていた。

最早「き、きつと大丈夫だよ。ああいつは何だかんだで来てくれるし……今回だって信頼感？ ツーカーの仲？ っていうのかな、返信しなくてもダイジョブデスネーって感じだから連絡こないだけなんだよ」と震える声と体でブツブツと自分に暗示をかけていた。

ここまで彰祐が時間に対して焦りを覚えるのにも理由がある。

まず現実世界で少しの遅れとは、加速世界ではかなりの遅れとなる。以前一度勇魔が遅れる事があり、その日彰祐は加速世界で約1日待たされることがあった。

次に、以外と彰祐はキレやすい、我慢に弱く待つのが嫌いなのだ。

これで良く探偵なんぞ勤まるものだと思うが、ソレはそれ。仕事と割り切ってしまうば多少は我慢もできようもので、それに勇魔という話し相手——相棒が居てくれるおかげで地獄の時間も耐えられるのだ。

つまり一人では仕事にならないのだが、それは触れてはならないこと。

突然、軽快な音と共にメールのアイコンが点滅しだす。

彰祐は目をカッと見開いたかと思うと、ものスゴイスピードでアイコンをタッチし内容を眼前に浮かべる。

送り主は勇魔だ。

「え!?…ミテナカツタ!? 間に合うって♪ だいじよだいじよぶ〜」

「くそやろうがああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」  
あああああああ!!!」

近所迷惑なんて頭の隅にすらなく、彰祐は力の限りで咆哮し目の前にある文面を両手に握った拳で叩き割ろうとした。

が、相手は視界に投影されただけの情報。割れるどころか触ることすら叶わず、空気を少し揺らすだけで勢いよく空振りした。

「はあ、はあ……。アイツコロス」

肩で息をし、血走った目で決意を固める彰祐。

18時まであと1分。

息を整えベッドに座る。

残りは10秒。

「…5…4…3…」

小さく、ほんの少しの音量で異世界へと旅立つカウントダウンをする。

「2…1——ツ、アンリミットドバースト!」

途端、何もかもが停止した感覚に陥り、一気に世界が様変わりしていく。

ダークとレックスが通う学校の前。

いや、その建物は誰がどう見ても学校とは呼べるような形をしておらず、前衛的な美術館といった方がしっくりくるような形状と変貌していた。

その場所にレックスが到着すると、先客がいた。

「おつす、ちゃんときたぜ！俺のが先に着いてたから俺のか——ブフルア！」

先客であるダークは右手を振ってレックスに挨拶すると、レックスは渾身の一撃でもってその挨拶に答えた。

一撃で減ったHPは3分の1。

この世界では痛覚は通常対戦の倍に設定されている。

ものの見事に鉤爪で挟まれたダークは、尻を突き出した形で地面に伏し、ピクピクと痙攣していた。

「ふう、スツキリした。どうした？行くぞ」

恍惚とした表情で簡単に言うレックスを睨みつけるダーク。

だが何かをするわけでもなく、渋々といった風に立ち上がりレックスに後からついていくのだった。

「いつまで……歩くんだよ」

かれこれ数時間、ダークとレックスは歩き続けていた。

廃墟と化したゴーストタウン。

荒涼とした大地が広がる平地。

枯れ果てた木々で彩られた森林。

様々な地形を闊歩し踏破した。

「なあダーク」

「んあ？なんだ」

疲労のせいかダークの声には力がない。

「今更……なんだけだよ」

どこか申し訳なきようにレックスは言葉が続ける。

その姿にダークは「らしくない」と短い感想を持った。

「しようがねえだろ、誰にだって失敗はあるんだ」

「失敗？一体何を失敗したんだ？」

「目的地は霞ヶ浦だ、間違いないよな」

「俺に聞かれても信憑性はイマイチだと思うが、俺が記憶している中では霞ヶ浦で間

違いはないと思うぞ」

「それで、その湖畔と……」

「そうだな、それで？」

「霞ヶ浦ってのはそもそもソレ自体が湖の名前ってわけで、湖畔ってことはその周囲全てを指すわけなんだが……」

いまひとつハッキリとしないレックスに、ダークは少なからず腑に落ちない、どこかイライラにもた感情を持つ。

「俺があまり頭良くない事はしってんだろ、簡潔に言え、簡潔に！」

「つまりだ！」

クルックとレックスは後ろを向き、ダークと目を合わせて溜めを作る。

「面積は220平方キロメートルもあって、日本で第2位の大きさを誇ってるんだよ」  
「……ナンバー2？」

「いい、イエス」

「Oh my God」

無駄に良い発音で心の中の叫びを吐露し、ダークはその場に膝を折ってしまう。

レックス本人でさえ挫折してしまいそうな気分になっており、その双眸はどこか虚ろなものになっていた。

「ダーク……どうせもうすぐ着く」

「そうだね、天国だね」

「大丈夫、なんとかなるものさ」

「そうだね、ヘブンだね」

到底会話のキャッチボールと言えるものではない。もはやレックスが投げダークがあさつての方向に飛ばす会話のバツテイングだ。

そんな不毛な事を続けていると、揺れ動く人影を二人の視界が捕え、二人が正気に戻り緊張感が増す。

まさかエネミーか、とも思ったが明らかに小さい。

それこそアバターのように。

「く、はあ……くそ」

前方にある影は徐々に二人に近づき、その姿をはつきりととらえることができた。

少し深い緑にゴツゴツとした体躯。西洋の兜のような頭部には闘牛のように鋭く闘気を孕んだ角。

まさしく目標のワイト・ブルその人だ。

「おい、ワイト・ブルだな。話がある、止まってくれ！」

レックスが第一声で声をかけると、ブルは少しもスピードを止める様子を見せず猪突猛進で突進してくる。

「なんだお前らは！ お前らもアイツの仲間だな？！ぶざけるなよ！！」  
ブルは二人を撥ねのけんばかりにスピードをだし、二人を通りぬける。  
ダークは瞬時に翻し、その背中ではなく片足めがけて手に持った鎌を力いっぱい投げ  
る。

「人が止まってくたっていいんだろーが！」

「——っ?! ダーク！待て！」

レックスの制止もやむなく、ダークの放った鎌は吸い込まれるようにブルの足へと近づき、スパッと右足首を切り離した。

バランスを崩し勢いよく地に転がるブルにダークとレックスは近づく。

「ウイートブルだよね？ 話があるんだけど」

ダークはうつ伏せに倒れたブルの前に屈み、手に出現させたクナイを首筋にあてがいつながら質問した。

その問いに返ってきたものは呪詛のような言葉だった。

「くそ……くそくそくそッ！ なんで俺がこんな目に。俺は絶対捕まらない逃げれるんだ逃げれるんだ！ 大体強くなることの何が悪いんだ!! 自分達こそ、こんな力の存在を隠していたくせに!!」

「何を言ってるんだ？ さっさと質問に——」



「黙れ!! 《ダーク・ブロウ》!」

ブルは力いっぱい体をひねり、うつ伏せから仰向けになるよう態勢を変えようとした。

同時に闇を絡めた剛腕が、突然ダークの頭蓋の前に迫る。

傍から見ても、とてつもない威力を秘めて、それはダークの頭部を打ち砕いてしまうことは明らかだった。

ダークはその必殺の一撃を、かすかに首を横に傾けることによって掠める程度にすることに成功した。

だが、問題はそこではなかった。

突きつけられたクナイとブルの急所との距離は0。

ブルが無理やり態勢を変えたため、クナイが首筋に突き刺さり、食い込み、火花を微かに灯しながら喉を裂いていく。

レックスとダークがブルの姿を認識した時には、その姿は胴体と頭部が綺麗に分かれていた。

「ち……く……しょう」

息が漏れる音を混じらせながらそう言い、ブルの体が弾けるように、いや実際に弾けて消える。

この時、レックスは嫌な予感がしていた。

ブルの異常なまでの必死さ。あれは一体どこからくるものだろうか。

そして、嫌な予感だからこそだろうか。それはみごとに的中してしまう。

ブルが砕け、火の粉を散らしたその場所。そこには本来アバターと同じ色をした小さな光の灯が残り、存命を主張するはずだった。

あくまでも、するはずだった。

ダークとレックスの双眸には、ブルの生きていた証はひとつも残ってはおらず、ただ荒れた土地が広がっていた。

「——ッは？」

意味が分からない、という意味が密度濃く籠められた一言だった。

なぜなら、それは相手の加速世界での死亡を意味していた。

なぜなら、それは依頼内容の完全なる失敗を意味していた。

「なんで消えてんだ……。なあ、なんで消えてんだよ！」

「俺が知るか！」

あまりにも予想だにしていなかった事態が起き、二人は混乱状態に陥り、おもわず怒鳴り散らしてしまう。

その最中、後ろ——ブルが走ってきた方角からザッザツと土を踏む足音がゆっくり

と、確かに近づいてくる。

足音が大きくなり、現れたのは一人のアバター。

ヘッドギアをはめたような頭部に筋肉のようにつくつにも割れた装甲、そして特徴的なのはそれこそグローブを装着したような拳。

「尋ねるが、ここに牛のようなアバターが来なかつたか？」

## EGオペレーション

「尋ねるが、ここに牛のようなアバターが来なかったか？」

「だったら……どうした」

レックスは感情をできうる限り押し殺した声で返す。でないとな今にも感情が噴火しそうだったからだ。

「知っているのか……。いや、もしかすると——消してくれたのか？」

鋼色のアバターからその言葉が出た瞬間、飛び出したのはダーク。

距離を一気に縮め、両手に一本ずつ持った小太刀で流れるような連撃を魅せた。

だがそれを相手のアバターは、それはダンスでも踊るかのようにリズムに乗って、トントンとかわして見せる。

「いきなり攻撃してくるとは無礼だな。だが手伝ってくれた礼だ、見逃してやる」

「生憎こつちは見逃す気はないんでね」

「事情聴取は最低でもさせてもらおうぞ」

レックスも頭にきたのか、鉤爪をこすり合わせながら相手に歩み寄る。

「なるほど、ならば手合せしてやろう。グレート・ウォール《六層装甲（シックスアー

マー》第三席、アイアン・パウンド。参る！」

パウンドと名乗ったアバターが踏み込んだ。

そこへダークが体を回転させながらの2撃を打つが、上半身の動きだけで回避される。

ダークの後ろに居たレックスが右手を突出し、パウンドはそれを右ストレートを打ち出して相殺する。

——いや、相殺ではなかった。

パウンドの拳の方が威力が勝り、レックスは後ろにのけぞってしまふ。その隙へパウンドは距離を詰め、入り込み、左左右とテンポよくパンチを入れる。

テンポも良いが威力も高い。

のけぞるだけだったレックスが、追撃の3連撃で数メートル吹き飛ばされてしまふ。

「ボクシングか？ その動き、経験者としか思えないが」

地に倒れ、痛みの残る体を無理やり起こしながらパウンドに問う。

「そう、俺は現実でボクシングを経験しているし、アバターもこの通りだ。加速世界で使わない手はないだろう」

「……つく、面倒な」

レックスと話すパウンド、その背後から音もなくダークが素早く忍び寄る。

小太刀を振り上げ、ヘッドギアの側面に突き刺そうとした瞬間、パウンドが振り向いた。

「経験というものも手伝ってか、殺気に敏感でな。シノビが殺気をもらってはだめだろう」

パウンドの凶器と化した左腕がダークの小太刀と交差し、さらに一步早くダークの頬へと届いた。

カウンターの決められたダークは輪郭を歪めながら威力に従い頭から後方へ吹き飛ばされる。

元々装甲が薄いダークがブルの攻撃で既に体力を削られた所にくらった電光石火のカウンターパンチ。

ダークは経つ気配も見せず、一瞬輝いたかと思うとその場に爆散し、金色の小さな光の球をその場に残した。

「金……か、脆いな」

パウンドは興味を失ったように踵を返し、レックスに向き直り腕をまげ再度構える。

「やりやがったな……」

レックスの声には怒気が満ち溢れ、周りには野生の肉食動物がもつ鋭い殺気が纏わっていた。

「……来い！」

パウンドの掛け声でレックスはパウンドに飛びついた。

鉤爪を使った隙のない連撃を絶え間なく放ち続けた。

それをパウンドは上半身の動き——スウエーだけで避け、躲し、受け流し続け、その最中に反撃の気配はまったくなかった。

「いつまで避け続けてんだよ！」

「なら反撃しよう！」

レックスがパウンドの胴体を扶ろうとしている時、パウンドは足を滑り込ますように踏み込み、レックスはそれによってバランスを崩してしまう。

倒れこむ瞬間に3発。

のけ反る瞬間に2発。

宙に浮く瞬間に1発。

もはや達人としか呼びようのない、それほどまでに無駄のなくなった実践的な巧みなコンボの数々の前に、レックスはまたもや地に伏してしまふ。

「もう一発で決まる！」

「——痛ッ！ く……ゲホ、ゴホッ。まだまだあ!!！」

動かぬ体に鞭を打ち、軋む関節に無理を強い、フラフラになりながらもレックスは立

ち上がってみせた。

「体力は残り少ないがよ、必殺技ゲージは満タンだ」

「必殺技で逆転できると思っているのか？」

「必殺技こそジャイアントキリングの鍵だ。師匠が教えてくれた」

両腕を力なくダラリと垂れ下げ、腰を前に倒し両足を開き鋭い眼光は相手に向ける……まるで恐竜のように。

「《エボリユーショナル》！」

まさしく文字通り進化し、レックスはテイラノサウルスへと成った。

荒廃した土地を踏み鳴らし響かせ、その咆哮は天を震わせた。

すべてを飲み込んでしまいそうな顎は全開に開かれ、目の前にある獲物——パウンドを食い散らかそうとする。

「恐竜になったか……でも」

眼前に大顎が迫りながらも諦めの様子を見せないパウンド。見せないどころか構えをより一層精錬された物へとし、闘気を滲ませた。

「でも言ったはずだ。必殺技で逆転できると思っていたのか？」

パウンドの闘気が爆発し——

「《鉄拳乱舞（ハンマー・レイブ）》」



数多数千数万のジャブ、ストレート、フック、アッパーそれらが乱れに乱れ視界を埋め尽くすほどに打たれる。

標的の大きくなつたレックスの頭部に全てが命中し、瞬く間に風前の灯だった体力が削れ——無くなる。

恐竜が顎を閉じるときには粒子となりパウンドの周りを飾っていた。

ポツンと一つのエメラルド色の光が揺れている。

「さいらばだ探偵よ」

灰色にかすむ視界の奥で、パウンドの背中が遠のいていくのをただ茫然と見送ることしかできなかった。

ここは年季の入つた板張りの床に少しシミの浮いた古臭い壁が映える内装の「BAR G・E」。

その内部には3人の人影が二つのソファアに座り一つのテーブルを囲みながらどこか暗い影を落としこんでいる。

「以上が今回の結果、失敗は失敗。大失敗だ」

皮肉げにそういつたのはレックス。

その言葉に手を振りながらパンサーは抗議する。

「いえいえ、見つけて頂いただけでも十分でしたし……何より別に話したかった事があるわけでもなかったので報酬は受け取ってください」

「失敗したのに報酬を受け取るのはカツコ悪いでしょ？ レックスはそーゆーの気にするからここは失敗で納めてくれねーかな」

「ですが……」

尚も食い下がるパンサーにレックスが前に出ながら冷たい声で言う。

「真実とは過程で事実こそが結果、師匠が言っていた。だから俺たち探偵に求められているのは過程よりも結果。真実よりも事実」

「……そうですか」

力をなくしたようにソファアに座り直し、パンサーは肩を落とす。

「……でも、でも私が納得できないんです！」

「納得もなにも無くないか？」

「依頼主が納得いかないと言ってるんです、報酬が受け取れないんだつたら私にできる事なんでもするんで言ってください。これは見つけたまでの報酬です！」

言っていることはめちやくちやだが、ものすごい剣幕で押し切られるためレックスとダークは閉口して、ただ頷くしかなかった。

我に返って落ち着いたのか、パンサーは乗り出した状態から咳払いを一つしてソ

フアーに座りなおす。

「それで、別件なんだが……」

思い出したように語りだしたレックス。パンサーとダークはつい視線をレックスの方へ集中させてしまう。

「お仲間がよろしく伝えておいてくれと言ってたぞ、グットレート・ウォールのドーン・パンサーさん」

「——ッ!？」

「……??」

一人は驚きを隠せず。

一人は疑問符を浮かべる。

「何言ってるんだ？ パンサーはレギオンには入ってないって」

「そもそもその前提すら嘘なんだよ。結果は変わりはないが真実を語ってやろう」  
レックスは続ける。

グレート・ウォールは離反者であるウィート・ブルを消さなければならなかったがどこにいるのかわからない。それに王はなんらかで手が離せないためレギオンメンバーで解決しなければならなかった。その中で事情を知らせず外部から協力してもらった案がでた。

そこで白羽の矢が立ったのが探偵であるレックスとダーク。報酬さえ払えばどんな事でもする彼らに居場所を突き止めさせようとしたのだ。結果的に居場所がわかり、ブルはちゃんと処分することに成功した。

「さてさて、俺たちがいつグレウオに情報流したんだよ」

「だからメツセージ送ったんだよ、霞ヶ浦にいるかもってな」

「でも全損だぞ？ 復活する時間も合わせてどれくらいかかると思ってるんだよ」

「それはだな、俺たちがパンサーに情報をわたし、それがあのアイアン・パウンドに横流しされる。俺たちが現実で移動してる間にパウンドは加速世界で移動しブルと戦闘。その終盤に俺たちとバツタリってとこだろ」

語尾は誰かに聞いただすように上がり、レックスの視線の先にはパンサーが居心地わるそうにうつむいている。

「よく……わかりましたね」

「パウンドがよ、去り際に俺の事を『探偵』って呼んだんだよ」

両手をあげ、降参のポーズを取るパンサー。

「どうぞ、煮るなり焼くなりしてください」

「何言ってるんだ、さっき自分で言ったじゃないか。「私にできる事なら何でも言ってください」てな。煮るなり焼くなりするのは元より決まってる！」

「……ええ？」

レックスとダークの双眸がキラリと猛禽類のように鋭く怪しく光った気がした。

「いやあ、このバーには花が足りないと思わんかね、ダーク君」

「わたくしウエーイトレスというものが大好ぶ……もとい大好きでしてねえ」

「今大好物つていったよね!?この金ピカ大好物つて!」

必死に叫ぶもゆらりゆらりとした二人の怪しきには勝てず。

「まずはレギオンから抜けて真つさらになつてもらいましようか。聞けばグレウオは自由なレギオンだとか……。それに迷惑料を盾にすればレギオンメンバーの一人や二人引き抜けないわけがない」

「それでウチに来てもらいましようね、ウエイトレスとして輝いてもらいましようね」

「助手がほしかったんだよ」

「萌えがほしかったんだよ」

「ひっ……ひい!」

その日、その店からは悲鳴が聞こえてきたせいで客がよりつかなくなったとか。

町が一望できる高台にて、真緑の巨体を持ったアバターが立っている。

その後ろから鋼と同じ色をしたアバターが近づく。

「我が王よ、例の闇の心意を乱用していた輩の処分は終了しました」

「……」

王は何も言わない。だがそれこそが返事だと思える風格が存在していた。

「あの探偵が対象と接触してしまつたようですが問題はありません、即座に対象を全損させたようで心意については何も知らないでしょう」

尚を言葉が続ける。

「我らの代償は探偵の接触役のレギオンメンバーが脱退したことです、彼女も今回の事にはほとんどなにも知らせて無いので問題はございません」

報告が終わると王に動きが見えた。掌をだし、その上には画面が表示され何かの動画が映し出されているようだ。

「これは……っ！ ここまでできたか、加速研究会！！」

その声は加速世界への憂いと異分子への怒りが込められていた。

## T o t h e b a r E &amp; G

## 或る日ノ店内

町はずれの海沿いに孤立してポツンと佇む建物があった。

西部劇に出てくるような外装の木造建築には、所々蛍光灯の切れかけで点滅を繰り返している電光看板が掲げられている。

〔BAR G・E〕

元々ホームと呼ばれるオブジェクトだったものを、所有者が趣味で改築したものだ。

町はずれに建てられているものの、意外とこの店を懇意にしている客は多く、既に常連と呼んで久しい者までいる程だ。

毎日、現実世界ではおおよそ午後の6時といった時間帯に盛り上がりを見せるこの店は、今日もその例に漏れず賑やかな音を撒いていた。

——いや。

これは本当に賑やかと呼んでいいのだろうか。

これは本当に駄弁る声が響く音なのだろうか。

突然、両開きの扉——スウィングドアがけ破られたように勢いよく開き、中から一人腰を抜かしながら出てきた。

「ひっ——ひい！」

「出ていくんならさっさと出やがれクソ野郎！」

這いずりながら逃げ出す灰色のアバターの鼓膜に噛みつく罵声はドスの聞いた女性の声だ。

「3秒たつたぞ、ノロマ！」

「も、もうやめてくれえ〜」

力の入らない足元に無数の銃弾が降り注いだ。

これで店内に残る人影は四人。

翠玉色をしたバーカウンターの後ろに隠れているRPGゲームのリザードマンのような姿をしたアバター。エメラルド・レックス。

その隣に膝を抱えて震えている金色の人影。首に巻かれた口元を隠す長いマフラーが特徴的な忍者型アバター。ゴールデン・ダーク。

さらにその隣には、座つたまま天を仰ぎ十字を切りだした、この店の常連客。ひよこのような淡い黄色をしたインドの修験者の恰好をしたアバター。レグホーン・モナクムがいる。



それに相對する一人のアバター。

店のテーブルに片足をあげ、両手にはマフィアが御用達にしていそうなマシンガン、トミーガンやシカゴ・タイプライターといった愛称で長年親しみをもたれてきたトンプソン・サブマシンガンを携えていた。

ネコ科のような尖がった耳に鋭い目つき。

夜明けの空を思わず淡いピンク色。

シャープな体を持った女性アバターの名はドーン・パンサー。

「おいおいレックス、さっさと止めてきてくれよ！」

「そうだと2代目、店員2号の不始末は責任者がとるものだろうが！」

「他人事だと思いやがって……。モナクムさんの幻覚でなんとかできないんですか!？」

「出た瞬間にハニカム構造にされちまう」

「モナクムさんそれでもレベル7つすか？」

「ならお前が出る店員1号！」

カウンターの影に所狭しと詰め込まれた男3人は、自分の身の可愛さがどれほどのものかを全力で論じ合っていた。

それが騒がしくなってきた時――

ズガガガガガガガガツ――!

と、カウンターの向こうで鉛の吐き出される音と、木が削り取られていくような音が3人の言葉を途切れさせず。

鳴りやんだ時に代わりに響くのは空薬莖の落ちる乾いた音と、鼻の奥をツンと刺してくる硝煙の臭い。

「てーんちよ、出てきてくださいよ。私まだわからないことが沢山あるんですからね?」

その声は先ほどとは打って変わってトーンの軽いモノだった。

だが3人は知っている。これが罠だと。

「だから、ね?早く——出てこいやクソ野郎どもがあ!!!」

再度パンサーの声にドスが効き、両手にかけられた引き金を躊躇なく引く。

(ご)指名だよ、早くいけつて〜!

(頑張れ2代目)

(無理無理無理無理ツ!)

銃声の響く中、男達は目配せだけで会話をする。

「なんで……、なんでこうなったんだよー!」

レックスの空しい叫び声も、2丁のマシンガンによってかき消されてしまった。

「今日もやってるかい？2代目」

「やってますよ、モナクムさん」

「BAR G・E」のスウィングドアを揺らし、いつものようにモナクムはカウンター席の右端から3番目へと座った。

「おうモナクム、一杯おごれや」

「奢るつたつて元々タダ酒だろーがワグテイル」

既にデキあがっているのか、すこしフラついた足取りでドカリとモナクムのとなりに座ったのは灰色——どちらかと言えば鉛色をしたアバターだった。

レド・ワグテイル。ネームにそう表示された曇り空のように鉛色をしたアバターは、モナクムと肩を組みながらレックスに注文を飛ばす。

「おれブルーモンね、モナクムにはスピリタス」

「なっ、何てモン注文してやがる！」

「あいよ、ちよつとまっけてくださいね」

そういつてそそくさと奥に引つ込むレックス。

モナクムはため息を吐きながらカウンターテーブルに肘をつく。

「まあ気を落とすなつて！アレを見て元気だせよ」

「あれ……」

モナクムはワグテイルの指さす方向に目を向けると。

——そこには、どこかぎこちない動きで接客をするパンサーがいた。

「お客様、コレ……こちらをお持ちしました」

たどたどしく動く後姿を見ながら、モナクムは口笛をならす。

「ヒュ、やつとこの店も花を添えるようにしたのか」

「これで酒もより一層おいしくなるつてもものよ！」

「ですよね？ はい、こちらブルームーンとスピリタス。それにつまみも置いときま  
すね」

「お、2代目気が利くね」

「酒の肴はつまみとネーチャンのお尻ってね」

カチン、と軽くグラスを合わせる二人。その勢いでまずは一口をグイっと体に染み込  
ませる。

「おいパンサー、せっかく猫耳ついてんだから語尾にニヤーをつけるよ」

気の抜けた緩い喋り方をするダークが、今まで奥に引つ込んでいたのだろう、奥の部  
屋から出てきながら猫耳ウエイトレスへと追加注文をする。

「ふざつ……！ くつ——、注文は以上でよろしかったかニヤア？」

「先輩の言う事を聞いてよろしく」

ダークはそれで満足したんだろう、また奥の方へ引つ込んでいく。

「ねーちゃん、こつちも接待してよ」

「お前完全に酔っ払いじゃねえか」

「えつと、……そちらはレックスが……」

「俺はねーちゃんがいいの〜!」

ワグテイルは子供が駄々をこねるように地団駄をふんで暴れ出す。

「おい、お客様は絶対王政だぞ。あと今は店長と呼べ、わかつたかにやあ?」

「くっ……。わ、わかつたにやあ店長」

渋々パンサーはワグテイルの元へ近づこうとすると、どつかりと椅子に座ったワグテイルはその動きを掌を突き出して停止させた。

「まってまって。やっぱりさ、その場で3回廻ってニヤアって言ってよ」

「ワグテイルさん解ってるね〜!」

どこから聞きつけたのか、ダークがひよっこり顔を覗かせ話に参加してくる。

そして3人の男衆に加わり、一緒になってパンサーを煽る。

「さあパンサー、君に決めた〜」

「店員2号のちよつといいとこ見てみたい」

「レッツニャー！」

「店長の命令だ、答えは訊いてない！」

パンサーは肩を強張らせ、ワナワナと震えていたが、急に憑き物が落ちたように微笑んだ後に、その場で綺麗に回りだす。

1回

2回

と、廻っていく中でおかしな事に気付いたのは素面の二人、レックスとダークだ。何故だかコマのように廻るパンサーの両手に何かが集まっているように見えた。いや、あれは集まっているのではなく――。

3回

キツチリ3回廻ったパンサーは両腕を直角に向け、その先にはレックス達が居た。

そして二人が気になったパンサーの手には、出現した2丁のマシガンがしつかりと握られていた。

「お客様には冥土（メイド）がご奉仕させていただきますニャー」

「……え？」

—— 20分後 ——

酒や汗のシミが浮く、ワックスのかかった木板の床の上には、まるで築地の市場に並

べられたマグロのようにボロボロになり、まさに死んだ魚の目をした男達が3匹ほど等間隔に並べられていた。

パンサーはとつくにログアウトしている。

電気の消された室内で、男達の口が開かれた。

「……生きてるか？」

「い、いきでまゝす」

「……………」

「モナクムさん？」

「逝っちゃいましたか？」

「……大丈夫だ」

「すいません、大丈夫なら立たせてくれませんか。なんか神経マヒってるんで」

「お生憎様、俺も手しか動かせないんでね」

モナクムは這いつくばったまま掌をグーパーと動かして見せた。

「てかよ、……店員2号高性能すぎじゃないか？だれもメイドに拷問48手なんか求

めちやいねえよ」

「流石グレウオで汚ったねえ仕事やってただけはあるね。……ん!？」

突然、比較的被害が低そうだったダークは誰からかのメッセージでも見たのだろう

か、目の前の文章に集中しだした。

そして——、スクツと勢いよく立ち上がった。

「……っ!？」

床に転がる2人はゴールデンの姿に目を丸くして驚愕する。

「ちよっ、お前動けるの!？」

「悪い、ちよい急用ができたから帰るわ!」

「1号、その前に俺たちを——」

「サイナラー!」

脱兎のごとくと言えはいいのだろうか、ゴールデンは流石ジャパニーズ忍者と言いたくなる様な見事なまでの速さで、残像を残しつつ店を後にした。

取り残された店の責任者と常連客。

数分後にソロッと戻ってきたワグテイルに助けられて事なきを得たとは風の噂である。



## 俺と彼女とアイツとダレカ

ある日の真昼間、彰祐はもくもくと昼食のサンドイッチとおにぎりを頬張っていた。だが、その顔は決して美味しいものを食べているようには見え、どこか険しくなっている。

昼休憩を告げるチャイムが鳴り、5分ばかり経っている時のことである。

その場には勇魔の姿はいない。しかし、決して一人で食べているわけでもなかった。

彰祐の額には汗がにじんでいるが、決して気温によるものではない。むしろ少し肌寒く感じる10月の中頃。彰祐や周りにはいる生徒の制服は長袖である。

「ねえ、なんで黙ってるの？」

隣に座る人影。彰祐に比べ凹凸のはっきりしたボデイラインがあるのはそれが女性のものだからだ。

本来、青春真っ盛りの男にとつては女子とのランチは人によつては狂喜乱舞してしまうようなイベントではあるはずだ。彰祐はそれにもかかわらず、ただ黙って尚且つ隣の少女から目をそらしながらBLTサンドを口に運んだ。

決して眼を逸らしたくなるような容姿を持つ少女ではなかった。

真珠のように潤いのある大きな瞳。

栗毛色の、風になびくセミロングの髪。

通った鼻筋に艶のある唇。

褒められこそはすれども貶されるような点は見当たらない、一時でも長く2つの眼と脳内に焼き付けたくなるような容姿を持った彼女になんの不満があるのだろうか。

「無視しないでよ」

少女は四つん這いになり彰祐に迫りよる。傍から見たら昼間からイケナイ事をするんじゃないかと思わせる構図である。

段々と近づく彼我の距離に反比例し、彰祐の顔に浮かぶ汗の量は多くなっていく。そして彼女の蠱惑的な声が鼓膜を震わせる。

「あんなに私をイジメてくれたのに」

また一步、腕を前にだし縮まる距離。

彼女の唇は彰祐の耳元にまで迫り、ポツリと一言。

「ね、店長」

瞬間、彰祐から滝のような汗があふれ出し、恐怖で顔が青く染まった。

その場から跳ねるように飛びのき、気づけば彼女の正面に向かい正座をして――

「すいませんでしたー!」

見事なまでにフォームの整ったDOG EZAを披露した。

腕の関節の角度はキツチリ30。、たたまれた足は平行に揃えられ額はコンクリートに擦りつけてある。

その姿に彼女——忠石 早苗（ただいしきなえ）またの名をドーン・パンサーはフンつつと鼻をならし眼を釣り上げながら見下している。

「それだけ？」

「それだけ……とは？」

「私、猫が見たい気分なのよね」

10月の、少し肌寒くなってきた遠くに色づく山の見える秋空を見ながら、まるで眩くように、かつしっかりと彰祐の耳に届くように言った。

「くっ……、すいませんでした——にやあ……」

「聞こえないわね」

屈辱を押し切った彰祐の一言はあっさりとは切り捨てて早苗。彰祐は一度は睨むものの「文句ある？」といった早苗の表情にあえなく負ける。

そしてすうつと大きく息を吸い込み。

「すいませんでしたにやあご主人様！どんな調教でもしてくださいにやあ！」

「——っ?!?!?!」

屋上どころかグラウンドにまで届くんじやないかと思うような大きな声で恥ずかしいセルフを叫んだ彰祐に、一気に狼狽しだす早苗。

「周りにいた屋上で昼休憩を楽しんでいた生徒たちが一斉に二人の方を向き驚きと怪訝が混ざり合った視線を向ける。」

「ちよつと!?!馬鹿あつ!!」

「どうかしたかにやあ?」

「気持ち悪いのよ!」

「ぐぶア——っ!」

真つ赤に色づき狼狽を示す表情（かお）に向かってニヤリと笑う彰祐に、早苗は羞恥と憤慨の混ざった正拳を突き出した。

忠石早苗との邂逅はひよんなことから始まった。彰祐と勇魔で加速世界のことです笑しながら弁当をつつくある日の昼下がりに。

「いや、店員増えて楽になったわ」

「お前こき使いすぎなんだよ、もしパンサーのリアルが目の前に現れてみる、どうなることやら……」

「いやいや、加速世界の知り合いにリアルで会おうとするなんてよっぽどのリスクと

運が必要だろ？第一同じ学校に3人もバーストリンカー、それも知り合いがいてたまるかつての！」

勇魔は鼻で笑いながらおかずと白飯を口に運ぶ

「その油断が……ん？」

ふと、彰祐は気がついた。ちょうど勇魔から死角になる真後ろ、彰祐にとつては真正面にいる女子グループがあつた。それだけでは普通だが、その一人がじつとことらを見ているのだ。

彰祐と勇魔から女子グループの距離はそんなに離れているわけではない。それに勇魔の声のポリウムもなかなかのものだった。何か気になることでもあつたのだろうか。

そこまで考え、彰祐に走るたつた一つの勘。

勇魔の能天気な顔を見ながら苦笑いを浮かべ、ぜひ杞憂に終わって欲しいと願うのであつた。——無残にもその勘はクリティカルヒットしてしまうのだが。

少女はグループになにかを断り、一人離れていく。そして反比例するように彼我の距離は近づいていった。

何も知らない勇魔の肩に置かれる小さな手。

思いもよらない感触につい振り向いて住まう勇魔。そして少女あは口を開いた。

「初めまして、パンサーです」

その言葉は後ろに音符でも付いているかのように弾んでいた。

「そういえば、ダー……杉森がいないわね」

「痛っ——、あ?」

早苗は、痛む頬をさする彰祐の正面に座りながら言った。

確かにこの場には彰祐とよく一緒にいる勇魔の姿はない。だがそのことに彰祐は慌てた様子もなく、ただ痛む右頬をさすりながら答えた。

「たまにあるんだよ、フラッとどこかにいってフラッと帰ってきたり、もしくはそのまま休憩終わるまでどこかに行ってる事がな」

「え、あんたその時ボツチ飯じゃない!?」

「違う友達と食うわ! 別に友達少ないわけじゃない!!」

早苗のあまりに理不尽かつ不名誉な言葉に声を荒げてツツコム彰祐。早苗はどうどろう、と馬を落ち着かせるようになだめていると、ふと見たグラウンドの端に見知った顔があることに気が付いた。

「ねえ、あれ杉森じゃない?」

「——え、どこだ!?!」

彰祐と早苗は急いで立ち上がり、勢いよく屋上の珊に駆け寄った。

グラウンドの右端、卒業生からの記念品として植樹された桜の木の並ぶ木陰に勇魔の姿はあった。

だがそれだけではなく――

「女……か?」

「女……ね」

遠くてハッキリとは顔は判らないが、女子生徒用の制服と風に流れる黒髪から勇魔の隣に居るのが女子というのはわかる。

早苗は肘をつきながら「へえ〜」とどこか納得したように頷いていた。

「確かにモテそうではあるよね、相手は誰なの?」

「――知らない。」

さも当然のように質問した早苗にとっては、意外な答えが返ってきた。思わず、反射的とも言えるスピードで聞き返してしまう。

「あんたが知らないの!?! 一体どういう――」

「……りもの」

「え、なんて?」

「この裏切り者があああああああ  
!!!!!!」

突然、彰祐は天を仰ぎながら力の限り咆哮（さけ）んだ。近くで鳴る大声に耳を塞ぎながら早苗は彰祐を見ると、今にも血涙を流さんばかりに顔を歪めている。

「くそ……くそお……。なんで、なんでなんだよお！　いくらちよつとくらい顔がいいからってサクツといつの間にかツレなんぞ作りやがってこん糞フアアアアアアアア  
○!!」

「うっさい」

「あ、すいません」

隣からの冷静な、それこそ氷点下並みの感情のない冷たいツツコミに、彰祐の沸点のあまり高くない怒りは冷まされてしまう。

「まさか彼女と会っているなんてね、そりや店長をほっておくわけだ」

「その言葉だけ聞くとアイツがダメ店員みたいだな」

「違うの？」

「……違わない」

彰祐はため息をつき、手すりに寄りかかるようにうずくまった。そして遠方に見える友人と、傍らにいる少女の姿を捉えながら物思いにふける。

「どうしたの、暗い顔して」

「やっぱ相棒でも知らないことはあるんだなって思つてよ」



「はあ？」

早苗は彰祐の一言に眉をひそめ、呆れた顔を作りながら答えた。

「そんなの当り前じゃない、他人と他人なんだから知らないことの二つや二つあつて当然よ、てか無い方がおかしい」

「まあ、そうだよなあ」

どこか気の抜けた声を出す彰祐。二人の昼休憩は予鈴と共に幕が下りた。

## 灰色の思い出

まるで燃えているかのように世界を染め上げる夕日。彰祐は決して軽いとは言えない足取りで家路につき、我が家のドアノブを握り締める。

「ただいま」

帰ってくる返事はないが、習慣とは変えられるものではない。そのまま迷わずに自室へ向かい、部屋着へと着替えていく。

フオーマルからカジジュアルへと変わった今でも、考えることは学校となんら変わりはなかった。

「確かに。勇魔は顔は少しは、すこーしはいいかもしれない。だが彼女だと……？それもなんか雰囲気的に美人であろう彼女だと!?!ははっ笑わせてくれる」

見事なまでの嫉妬、ジェラシーだ。

部屋で高笑いをしていると、だんだんと客観的になれたのか恥ずかしくなり押し黙る彰祐。別に聞いている人はいないから良いじゃないかと言う人も、これまたいないのである。

そして彰祐は考えることをやめた。

有り体に言えばボーっとしただした。もうどうでも良くなったのか、はたまた考えすぎで頭がおかしくなったのか。どちらにせよ口を半開きにし、目は何も無い中空の一点を見つめている事実は変わらない。

5分くらいたつただろうか、微動だにしない彰祐だったが、彼を動かすことが起きた。「ん、メールだ」

右上の仮想現実上に表示された質素な便箋型アイコンが点滅して、彰祐の意識は一気に覚醒した。

「差し出し人は——勇魔か」

名前を確認した後に入差し指で欄の一番上を2回触り、本文を表示する。

「なになに、見せたいものがあるから夜の9時丁度に店に来て欲しい、だど？見せたいものってなんだ？」

彰祐はその旨を伝える内容の文章を返信すると——即座に返答は返ってきた。

・「だから、それはお・た・の・し・み」

思わず吐きそうだった。

「あいつはいつからそんな趣味してたんだ？」

そうやってメールを眺めてくると、突然目の前に一つの表示が現れた。

早苗からの着信だ。彰祐は承諾を押しTV電話に出る。

『ねえ、あんたのところにも来た?』

「メールか?来たぞ」

「聞きたいんだけどさ、アイツがこうゆう事する時って大体どんなことが起きるの?」

「いや知らね」

『はああ!?!』

知らないものはしようがないじゃないかと彰祐は思ったが、目の前の少女は止まらな  
い。まるで弾丸を浴びせるかの如くまくし立てられる。

いい加減鼓膜が震えすぎで痛くなつてきそうなので指を耳に入れうるさいとジエス  
チャーをして言葉の弾幕を止める。

「一年」

突然つぶやかれた単語に早苗はハテナマークを頭上に浮かべ、彰祐に思わず聞いてし  
まう。

『なにが?』

「約一年、俺が勇魔と初めて会ってからの日数だ」

『……あんたそれでよく相棒って言えたわね』

「甘いな、あいつがウチの店員になつたのは1年もたつてない!」

『尚更ダメじゃない!!』

彰祐の目の前に映る早苗はわざとらしく眉間に手を当て、天を仰ぐ。

「だから呼び出すことはあっても呼び出されたことはなかったんだよ」

『より一層不安になってきた。どうしてくれるのよ』

「まあ、頑張れ？」

『そこで語尾上げないでくれる!?!』

・「やべっ超不安になってきた。落ち着け俺、師匠も言っていたじゃないか。緊張は有意義、不安は無意味って」

『前から気になってたんだけどさ、その師匠って誰なの？ワグテイルさん？』

早苗のふとした質問に、彰祐の顔つきが変わったのが早苗にはわかった。その少し驚いたような、陰が差しているような表情のまま彰祐は答えた。

「ちがうよ。パンサーも、それにダークだって会ったことないよ」

『ふうん、その師匠とやらはアンタの親なわけ？』

「そうだよ、それに初代G・Eの店長で探偵。もともとあの店自体が師匠が買った家さちよこつと改装したものだしね」

そこまで話を聞いた早苗は、何かを考えているようだった。そしてその考えがまとまったのか、顔をあげた。

『なら、いまはどこに居るの？』

「——っ」

彰祐は息を飲んだ。傍から見ればいたって普通の質問に彰祐は目を泳がせ、少しの間を置いてようやく引き絞るように言葉を紡ぐ。

「それは——、」

突然、彰祐の家に来客を知らせる玄関のチャイムの音が響いた。その音は通信を通して早苗にまで聞こえたらしく、予想だにしていなかったことに目を丸くしていた。

「ごめん、人が来たから！ それじゃ9時に」

そう言つて彰祐はテレビ電話を終了させた。切れる間際の早苗は何かを言おうとしていたが二の句を継がせるまえに通話は終わっていた。

彰祐はベッドから立ち上がると少し逸る足取りで玄関へと向かい、ロックを外した。すると扉が開き、その前には一人の女性が立っていた。

「マヤ姉、どうしたの？」

マヤ姉と呼ばれた女性は少しはにかむと、家の中に入りながら答える。

「今日おばさんから頼まれたのよ。帰りが遅くなるから彰祐の晩御飯つくってくれないかーって」

そう言いながら黒髪をうなじのあたりで束ねた女性は靴を綺麗に揃え、靴箱へと収める。

本名、上河内 麻耶。彰祐より少し低いくらいの身長に、いつもうなじの辺りで束ねた黒髪。右目にある泣きぼくろが特徴的な彰祐の幼なじみだ。

向かいの家に住んでおり、帰りの遅い彰祐の両親に代わり度々晩飯をつくったりしている。

まっすぐ橘家の台所に立ち、先ほど買ってきたであろう食材をエコバックごと台所の上に置く。

その間に彰祐は二人分のマグカップを出し、その中へインスタントのミルクティーの粉を入れる。

「もう準備したけどさ、ミルクティーで良かったよね？」

同じ形の色違いのマグカップの中へ電気ケトルの中にあるお湯を注ぎながら彰祐はマヤに聞く。

「大丈夫よ」

短い答えが返ってくると、彰祐はスプーンを取り出し底の方に残っている粉をかき混ぜて溶かしていく。

・その横を麻耶は通り過ぎ、リビングにあるテーブルの椅子のいつもの定位置へと座ると、少し遅れて彰祐がミルクティーを持ってくる。

「ミルクティーになります、お嬢様」

「なにそれ」

「ちよつと紳士になろうかとね」

「ふふ、似合わないよ」

麻耶はクスクスと笑いながら彰祐から受け取ったミルクティーを一口すすり、そばにあつたテレビのリモコンでテレビを点ける。

明るくなった画面のむこうでは、最近話題のモデルや芸人が大御所芸能人のMCとともにトークを繰り広げるバラエティをやっていた。

「最近学校どうなの？」

「まあまあ」

「とてつもなく素っ気ないね。お姉ちゃんないちやうよ」

テレビの音をBGMに、十二畳のリビングで他愛ない日常会話が交わされる。

「もう大丈夫なの？」

「大丈夫って何が？別に怪我なんかしてないけど……」

「去年までヤンチャしてたんでしょ？今まで聞かなかつたけど」

その言葉に心当たりがあつたのか、彰祐は苦い顔をつくつた。

「知つてたんだ」

「そうよ、お姉ちゃんはなんでも知つてるわよ」



「なんだよそれ。ま、もう心配しなくても大丈夫だよ。今は普通に友達と遊んだりしてるだけだから」

・麻耶を安心させようとした自分の言葉に「あつ」と声を漏らし、彰祐大事ななにかを思い出した。

・「マヤ姉。今日9時から用事があるから晩飯早くして」

・「別にいいけど用事って？」

・答えづらい質問に彰祐は少々逡巡し、最も当たり障りの無い言葉を選び抜く。

・「……友達とゲーム」

・「ゲームねえ。最近やってないな。最後にやったゲームは彰祐とやった……あれ、なんてゲームだっけ？彰祐覚えてる？」

・彰祐は軽く首を振って否定した。

・どうしても思い出したいのか、麻耶は頭を抱え唸りだした。そして頭から煙でもでるんじゃないかと心配になってきたところで突然麻耶は顔を上げた。

「ねえ、お姉ちゃんもそのゲームやってみたいな！」

「えエ!?! いや、それはちよつと……」

突然の申し出に彰祐が目をそらすと、麻耶はさらにスイツと身を乗り出した。

「そんなにハマってるんなら面白いんでしょ？ お姉ちゃんも興味あるな！」

「でも格闘ゲームだよ？」

「そんな事言つて。彰祐格ゲーあまり好きじゃないじゃない」

「いや、本当だつて」

「ならただ事じゃない格ゲーなんだね！」

「いや、まあスリリングでただごとじゃないけど……」

「ならつ！」

麻耶が目を輝かせた瞬間、台所のほうで何かが崩れ落ちる音がした。

「ギャー！今晚の食材達が!!」

駆け足で台所の方に向かう麻耶。

こんなところで2回目の天の助けがきてくれた。

床に落ちたトマトやらレタスやらを拾い上げ、慌ただしく整理し直し始める麻耶。

その姿を見て、彰祐がこみ上げる笑いを堪えずに吹き出す。

しばらく笑つたあと、ついでに晩御飯の準備をしている麻耶を見る目は先ほどとは違

う感情を持つていた。

「それに、もうマヤ姉はできないんだよ……」

自分にはか聞こえない声で静かに呟く彰祐は、寂しい笑みを浮かべていた。

## NEW Challenger

年季が入り、重心をずらしただけで軋むカウンターの椅子に座り小一時間程が経っていた。

現実世界で茄子とピーマンと豚バラ肉の炒め物と白米、そしてトマトサラダを胃袋に詰め込んだレックスは心地いい満腹感を感じながらどこか上の空で自分で作ったカクテルを飲んでいた。

ダーティーマザー。ブランデーにコーヒークリキュールを加えたカクテルのほろ苦さは食後の胃と気分を落ち着けるのに向いていた。

CLOSEにしてあるため、店にレックス以外の人影はなく閑静としている。いつもの酒の匂いは薄れ、どこか安心する木の匂いがするばかりだ。

レックスは視線を手元に移す。グラスに注がれた琥珀色の液体が波紋を描き、翠玉色の自分の姿が揺らめいて写っていた。

スウィングドアが開いた音がした。音の方向に目をやるとそこには夜明けと同じ色をした猫の耳を持ったアバターが立っている。

ドーン・パンサーは軽く辺りを見回したあと口を開いた。

「あいつまだ来てないの？」

「俺たちが早く来すぎたって発想はないのか？」

「お生憎様、9時ジャストにこの世界に入ったから」

「なるほど、あいつが遅れてるのは間違いないようだ」

そう言うやいなや件のダークからメッセージが届く。そのメッセージにはあと10分ずつとの旨が書かれてあった。

メッセージウィンドを開いていると横からパンサーが体を寄せて覗いてきた。目だけで文字を追い、数秒の後に興味が無くなったかのように離れていく。

「それじゃ私もゆっくり待つとしますか」

ストーンとカウンタートーブルの右から3番目の椅子——レックスの左横に座ると、慣れた風に脚を組んだ。

「とりあえずなんか甘いの」

「は？」

「だから、飲みやすくて甘いお酒作ってってあんたに頼んでんの」

「それが人に物を頼む態度か!？」

脚を組み、テーブルに肘をつくその姿は薄暗いシックなバーにこそ映えるだろうが、生憎今はただの集合場所と化した木造の家。バーということ以外はほとんどの条件が

合わない大衆酒場だ。

あくまでその時と場所によっては観れる体勢を崩さないパンサーに、レックスは飲みきっていないグラスをその場に起き、嘆息しながら席を立ててカウンターの向こう側へと歩き出す。

カウンターのテーブルを挟む形で向かい合うようになった二人。レックスは飲みやすいのをご所望なら定番のカルアミルクでも作ろうとコーヒークリームに手を伸ばすと、背後から声がかかる。

「あ、どうせだから私知ってなさそうなの作つてよ」

「大丈夫、わかってるって」

「カルアミルク作ろうとしてるのに？」

なぜわかったのかとパンサーに背中を見せながら硬直していると、どうやら右手はコーヒークリーム、左手は牛乳に手を伸ばそうとしていたのを見られていたらしい。流石にパンサーもカルアミルクのことは知っていたようだ。

「そもそもパンサーは酒なんか飲んだことあるのか？」

「無いわよ」

「だろいな」

「なに納得してるのよ！」

背後から聞こえる囁み付くような声を聞きながらピーチリキュールを手取る。氷を入れたグラスに半分より少し少なめに注ぎ、後からオレンジジュースを同じ量だけ注ぎバースプーンで軽く混ぜる。

「はいよ、ファジーネーブル。まあほとんどジュースみたいだから安心して飲みな、お嬢様」

「お嬢様つてなによ」

パンサーは少しムツとしながら冷えたカクテルを口に含んだ。

「へー、確かにジュースみたいね。ただ少し喉がスーッとする感じが新鮮ね」

「お気に召したようで何よりですお嬢様」

「だってパンサーつてか忠石早苗はお嬢様まではいかなくても金持ちだろ？」

「なっ、なんで!?!」

なんでそうなるの、という意味ではなくなんで分かったのかという意味を含んだパンサーの言葉にレックスは得意げに答えた。

「今日TV電話したじゃねえか。その時に後ろに見えたオーディオ機器が庶民が趣味で手を出すには少し恐ろしい金額をしたシロモノだったからね。で、お嬢様とか言ったのは意識して無作法な事をするのか知らないが無意識での端々の所作が結構キツチリとしてたから。ただそれだけだ」

言葉を完結させたレックスを見るパンサーの目には言葉では表せない呆れにも似た衝撃が走っていた。少しの間思考が停止してしまった頭にガソリンを入れ直し、無理にでも動かし会話にもどる。

「一体そんな観察眼どこで手に入れたのよ」

「知りたいのか？」

「ええ、もちろん」

「なら一つ条件がある」

レックスは間を置き、パンサーの前に人差し指を立てた。

「出来る範囲ならやってあげる」

「簡単なことだ、ちゃんと俺を名前で呼べ」

「……は？」

あまりにも突拍子もなければ脈絡もない内容にパンサーはコメディイのようににぎりコケてしまう。

「一体私がいつあんたを名前で呼んでないって？」

「なら店の時は？」

「え？」

「だから店をやつてるときはなんて呼んでる」

「あんたが言ったから店長って呼んでる」

「なら店が終わったら？」

「そりゃ……あんた」

「学校では？」

「あ、あんた……」

二人の間に気まずい空気が流れ出した。正確には気まずくなっているのはパンサーだけなのだが。

「えーつと、あん——」

「レックス」

「わかった、今度からレックスって呼ぶわよ」

「あと彰介な」

「それは馴れ馴れしくない？」

「ダークってか勇魔にも最初から下の名前で呼ばせてたからな。それに橘ってよばれるのはむず痒い」

「ふうん、わかったわ」

そこでパンサーはファジーネーブルを飲んで一息いれ、レックスに向き直る。

「それじゃあ教えてもらいましょうか。って言ってもあらかた想像はできるけどね」



「へえ、なら言ってみな」

「どうせ師匠でしょ？」

レックスは軽く首を縦に振って正解と無言のままに表した。

「やっぱりその師匠に会うことはできないの？」

夕方の話題を持ち出され、またも困惑すると思われたレックスだが、今回はあつさと言葉が出てきた。

「無理だな。残念ながら俺もどこにいるか知らないんだ」

「そうなの。それならそうと言ってくれればいいのに」

パンサーは特に問い詰める様子を見せず、あつさと引き下がった。

ちやうどその時だった。もう一度スウィングドアの開かれる気が軋むような独特の音が店内に響いたのは。

入口に立つ来訪者に顔を向けずレックスは挨拶をする。

「思ったよりも早かったなダーク」

「ゴメンゴメン。ちよつと迎えに行ってたからよ」

「迎えて……」

そこまで言つてレックスも、そしてきつとパンサーもある違和感に気付いた。

ダークの背後、具体的に言えば肩甲骨のあたりからなにやら平べったく長いものが2

本左右に出ている。言ってしまうえばうさぎの耳である。

この後ろの奇妙珍妙なものに対して聞いただしたのはパンサーだった。

「ダーク、その後ろのはなに？強化外装？」

「よくぞ聞いてくれた」

途端、ダークは待つてましたと言わんばかりにオーバーリアクションを取ると、両腕を上を広げた。

「さあさあお立会い、本邦初公開！——ババン！」

「はじめまして、セルリアンポリッシュです！」

ダークの後ろから跳ねて出てきたのは兎。見た目どうり言葉さえも弾ませる兎。長い耳を後ろに垂れ流し小動物を思わせるつぶらな瞳。首にはこれまた風になびくだろうと推測されるダークと同じようなマフラーが巻かれている。ダークの3分の2程度しかない身長に不釣り合いなのは踵から生えた大振りなカッタラスのようなナイフ。

「どうだ可愛いだろ？」

そういつてダークはポリッシュを後ろから抱きかかえると、ポリッシュはくすぐったそうに身をよじり出す。

「やんっセンパイくすぐったいです」

「……110であってたっけ」

「レックス、ここはGMに行ったほうがいいんじゃない？」

「糞ツ！レベル10になるしか通報はできないのか！」

端々に出てくる不穏なワードにダークは慌てて制止の声をかける。

「待て待て待て、一体なにをする気なんだ？」

「ロリコンを直してあげようと思ったの」

「おめえ、幼女はまずいって」

「なんでそうなるの!？」

「あ、あのー！」

このダークに対する蔑みの雰囲気を変えたのはポリツシユだった。ただしより悪いものになってしまったが。

「センパイはワタシの父親なんです！」

「……あ」

「……うん」

「ポリツシユ……やってくれたな」

「えっありがとうございます！」

レックスとパンサーは諸悪の根源を刈り取ろうと自分の武器を取り出し、切先と銃口を目の前のへと向ける。ダークはというと何かを諦めたように天を仰いでいた。

その光景を見て、ポリツシユは自分の間違いに気づいた。

「あっ、違います！センパイはワタシの親なんです!!それにセンパイとは歳は一つしか違いませんかから!」

「そうなんだ、早く言ってくれば良かったのに」

「危ない危ない、店員が一人減るところだった」

「……。——つて親あ!?!」

ウサギが仲間になりたそうな目で見ている。

パンサーとレックスの声が見事にハモる。二人は目の前の同じマフラーをつけた忍者と兎を見比べる。

「なんだよさつきから……えらいお前ら息がぴったりじゃねえか。夫婦?」

「言ってる場合じゃねえ(ない)！」

立て続けに声をハモらせ、互いに少し睨むように一瞥するも、そんなことより目の前の大事件。

「おまつ……親っていつからだよ」

「5ヶ月前かな」

「なんも言えねえ」

このやり場のない感情を心の内に抱えてしまったレックス。

「リアルでは彼女ができてこっちでは子ができて……。これが噂のリア充ってやつなのか」

「は?なんだそ——」

「どういうことですか!」

レックスのつぶやいた言葉に釣れたのはダークではなくその子、ポリッシュだった。唐突に声を荒らげた彼女には鬼気迫るものがある。

「センパイに彼女？何を言ってるんですか。それは本当なんですか!? 一体どんな人でどんな雰囲気です。センパイとどこまで行ってるってどんな人なんですか！早く言ってくださいさもないと体の関節ごとに切り分けますよ？言ってくださったらその矛先が変わるだけなのでお気になさらず。さあ…さあ！」

「落ち着け、同じこと2回聞いてる」

ズイズイせまるポリッシュに「どうどう」となだめる。

「今日の昼にな、屋上からダークとその噂の彼女が樹の下でなにかを話してるのを見ただけだから。そこまで詳しくは知らないから」

「昼……。樹の下……」

ポリッシュは何かを考えるように顎に手を添えると、事の真相がわかったのか明るくなった顔を上げた。

「いや〜さすがセンパイの相棒ですね。良い事言うじゃないですか！店長は素晴らしいです！」

「え、なんか解らないけどアリガトウ……。って店長!?!」

レックスは驚愕した。そしてダークの方を見ると、申し訳なさそうに事情を説明して

くれた。

「レックス、こいつもここで働かせてやってくれないか」

「流石に4人は多くないか？」

「頼む！ やっぱ子の側に居ないと心配なんだよ」

「子の側に……ね。わかったよ、お前がちゃんと新人の面倒みるよ」

あつさりと了承したレックスにパンサーは再度聞く。

「いいの？」

「別に金払うわけじゃないからな。あつちの仕事だって別に毎回面倒なのが来るわけじゃないし、暇は余ってる」

「やった！ センパイありがとう。愛してる！」

「ああ、子が可愛くない親なんて居ないからな」

その瞬間、ポリッシュだけでなくなぜかパンサーまでもが呆れた顔を作った。

「なるほどね、理解したわ」

目に見えて落ち込んでいるポリッシュと同情の眼差しで肩を叩いて慰めるパンサー。だがレックスは困惑を口にする。

「……わからん」

レックスは空気が変わったことまでは解る。しかしなぜポリッシュが不機嫌そうに

なったかが不可解だった。ダークに至っては最早空気が変わったことすら気づいてないようだ。今も笑顔でポリッシユの頭を撫でている。

ブレインバースト内での1時間が過ぎた頃、店内は内装を変えていないにもかかわらずどこか華やかになっていた。

ポリッシユの追加により女性アバターの増加で、気分だけでも酔っ払うリンカー達はたどたどしい可愛さを持つポリッシユで心の保養にもなっていた。

ここでタチの悪いのがモナクムという男だった。

「ポリッシユちゃん、テイクアウトOK?」

「店員に手をだすなよー」

バーボンを5杯駆けつけに煽ったモナクムは30分で既に出来上がっており、新人にちよつかいを出す害悪となっていた。

おもわずレックスも注意を促すが、どうやら夢心地の頭にはそれこそ馬に念仏ならぬ酔っ払いに念仏となっていた。

「ちよつと位いいじゃねえか。ね、ポリッシユちゃん」

「すいません、何をほざいてるのか聞こえなかったのもう一度お願いしますか?」

はじける笑顔に弾む声、ついでに殺意も跳ね上がっているポリッシユにモナクムの酔



は醒め苦笑いを浮かべる。

ちようどそのやり取りが終わった時に裏でつまみを作り終えたダークが顔を覗かせた。まるでシステムののようにポリッシユの殺気が消えていく。

「モナクムさん、ポリッシユにちよつかいかけたら流石の俺も黙ってないつすよ〜」  
ポリッシユとは違い、半分冗談まじりに注意をするダークにポリッシユが答えた。

「センパイ大丈夫です、モナクムさんは無害ですよ。ね?」

「え……、あ、そうですね」

「声が暗いつすけど飲みすぎて気持ち悪くなつたんすか?」

モナクムの不思議な態度にダークは首をかしげるが、注文が入ったため厨房に引っ込んだ。

それを横で見ていたレックスとパンサーは。

「ポリッシユ、恐ろしい子!」

「なんだそりゃ」

「さあ、なんかおばあちゃんがよく使ってたわ」

「へ〜」

と完全に無関係をキメている。

「そうそう、レックス」

酔いが綺麗さっぱりとなくなったモナクムはレックスに思いつきの話題を振った。

「さつきなかなかご機嫌なビギナーのバトルを観てきたんだけどさ、今度お前も観なう。」

「ご機嫌って……どんな奴ですか」

「ガソリンで動く単車乗り回しながら『ヒツハアアア、メガラッキー！』とか叫んでるレベラー」

「いいねえ、俺観たいっす！」

食いついてきたのはいかにもこの手の話が好きそうなダークだった。

「そのリンカー教えてください。見かけたらすぐ観戦するんで。な、レックス」

「最近仕事ないから暇か、観てみるか」

約束を取り付け、ダークは少し嬉しそうにガッツポーズをとった。

「仕事ってこの酒場じゃないんですか？」

すると、まだ就業1時間未満のポリッシュが疑問を口にした。

なかなかピンポイントな質問だ。

どう答えたものかとレックスが苦い顔を作っていると、パンサーが淡々と答えてしま  
う。

「店長は何でも屋として色んな人にこき使われているのよ、ポリッシュも気になるこ

とがあつたら調べてもらえば？」

「お、おいそれは——っ」

「なんでも屋ですか！」

言葉を続けようとしたレックスを瞳を爛々と輝かせたポリツシュが遮ぎる。

「流石センパイの相棒さんです、なんでも屋をやつてるなんてカツコイイです！」

「そ、そうか。アリガトウ」

純真。あまりにも純真。どう言い逃れたものかというレックスの画策はどこへいったのやら、目の前の純粹さの前には顔を引きつらせ、ただただ首を縦に振るばかりだった。

「それじゃあワタシも何かあつたら何でも屋を頼りますね。それじゃ店長、業務に戻るであります！」

ビシッと敬礼を決め、接客に戻るポリツシュ。その後ろ姿をやるせない雰囲気を出しながら見送るレックス。そしてその姿を目を細めながら愉快そうに見ているモナクム。

「恐竜は子兎には勝てなかつたか」

「言つててください」

モナクムの言葉に少し刺のある言葉で受け流す。

師匠から受け継いだ探偵業に対して誇りを持っていたレックスのことだ。秘密にし

ようと思っただけに、それが何でも屋と言われたらどうにも腑に落ちない。だがそれを咎めることもできない歯がゆさに板挟みにされ、なんとも微妙な顔を作っていた。

このやり場のない感情を払拭するために話題を変える。

「話は戻しますが、そのビギナーはどこで見たんですか？」

「東京」

「県外じゃないですか。モナクムさんそっちに住んでるんですか？」

「おいおい、さりげなく詮索すんなよ」

引つかからなかったかと冗談交じりに笑うレックスに、両肩を上げ呆れた演技をする。

「たまたま用で行ってたんだよ。」

そこで一度間を置き、グラスの中身を一口含んで続ける。

「リンカーの名前はアッシュ・ローラー。ちゃんとダークにも教えとけよ」

「レギオンに所属は？」

「グレウオだったかな」

「グレートウォールですか。あらあらまあ何かと縁があるようで」

「縁？」

「なんでもないです。場所と日時は？」

「夕方、杉並区」

「……杉並区」

呟くレックスの声には陰りがある。気づいたモナクムはレックスにフォローを入れるように言葉をかける。

「おいおい、もうアイツは居なくなつた無関係の土地だよ。そう気にしなさんなつて。もう終わったことだぜ？」

「別に気にしてないですよ」

言いながらレックスはグラスを拭き始める。さつきから言葉に元気がないことに気がついてないのかとモナクムは一人アルコールで口を湿らしながら思う。

「やつぱり子供だねえ」

誰にも聞こえない声でそうつぶやいた。

心の中でご馳走様と叫ぶ、酒のシミが浮くテーブルに手について立ち上がる。「モナクムさん、また今度」

レックスに右手を上げて答えた。ライトイエローの背中は夜の暗がりへと消えた。